

ダンテの『俗語詩論』

——「自己注解」としての解釈の試み——

岩 倉 具 忠

は じ め に

第Ⅰ章 言語の変化

1. 第Ⅰ巻第9章の意義
2. 第Ⅰ巻第10章の解釈
3. ダンテの見解の独創性
4. 言語の性質と「言語変化」

第Ⅱ章 「地方性」の超克 “a proprio divertere”

1. 方言分布についての考察
2. a proprio divertere
3. 用語法にみられる「共通項」
4. 引用頻度と章節の配分

第Ⅲ章 シチリアおよびアプーリアの詩人たち

1. 「シチリア派」の定義
2. 「シチリア派」成立の背景とその言語的特質
3. ギエード・デッレ・コロネとグイニツェッリ
4. ジャコモ・ダ・レンティーニとリナルド・ダクイーノ

第Ⅳ章 トスカーナの詩人たち

1. 批判をうけた詩人たち
2. ギットーネ・ダレッツォ
3. ボナジュンタ・ダ・ルッカ
4. ガッロ・ピサーノとミーノ・モカート
5. 肯定的評価をえた詩人たち——チーノとカヴァルカンティ——

第Ⅴ章 「方言学」の実体

1. 「方言探索」の性格と目的
2. シチリア・アプーリア方言の場合
3. トスカーナ方言の場合

お わ り に

は じ め に

『俗語詩論』の著名な数章によってダンテがイタリア語の方言学の基礎を打ち立て、近代のロマンス言語学への道を開いたという俗説は、すでにブルクハルトの『イタリア・ルネッサンス文化』にみられるが、¹⁾現在なお完全に払拭されたわけではない。それどころかどの言語学説史を繙いてみてもダンテのこの作への言及がみられ、相変わらず大同小異の解説がくり返えされている。二三の主な例を発表の年次にしたがって以下にあげてみよう。

「正当な理由から近代言語学の先駆とみなすことのできる最初の著作は、ダンテ・アリギエーリの『俗語詩論』である。この著作でダンテは、14世紀の流儀でイタリア語がフランス語、プロヴァンス語、スペイン語等と親族関係にあることをつきとめ、イタリアの主な方言の特徴を指摘している。この著作はヨーロッパの知識層にはじめて言語の歴史的変化についての概念を示したという点で一般的にみてとくに重要である」(カルロ・タリアヴィーニ、1934²⁾)。

「確実に1303年に執筆された『俗語詩論』においてダンテは時代を先き取りして、³⁾の言語、オック語、オイル語を同一語派に属する言語とみなし、(適切な例をもってこの説を証明している)ばかりではなく、注目すべき正確さでイタリアの14の方言形を区別している。今日のロマンス言語学者たちは、その点でダンテに高名な先駆者の姿をみとめることができるのである」(ル・ロワ、1963³⁾)。

つぎにあげるロビンズは、様々な点でダンテが現代言語学の諸学説の先駆をなすとみなし、くり返しダンテに言及している。

「来るべきルネッサンスの予告者とみなされることの多いダンテは、書きことばであるラテン語にロマンス語の諸方言を対置させ、この分野の研究を大いにながした。ダンテ自身俗語をもちいることにより多様なイタリア語の話し

- 1) 「その著『俗語論』は、…概して一つの近代語について論述した最初のものである。その思考過程とその結論は言語学史に属するものであり、そこにいつまでもきわめて重要な位置を占めるにちがいない」(『イタリアルネッサンスの文化』柴田治三郎訳、下巻、pp. 100)
- 2) C. Tagliavini: Panorama della storia linguistica, Bologna, 1963, pp. 35-36 但し初出は *Enciclopedia italiana* の *Linguistica* の項 (1934)
- 3) M. Leroy: Les grands courants de la linguistique moderne, Bruxelles-Paris, 1963, p. 8

ことばのなかからイタリア半島に共通の文学語、ついで公共語を定着させた⁴⁾」
「……ラテン語から派生した三言語は、イタリアでは “si”，南フランスでは
“oc”，北フランスでは “oil” をもちいる。……ダンテのこの言語区分から南仏
の *Langue d’oc* (プロヴァンス)、北仏の *Langue d’oil* というフランスの主要な言
語にもとづく地域の名称が生まれたのである。 / こうした言語地域のなかから、
ダンテは正確に方言上の差異をつきとめ、この著作における後続の章で多種の
イタリア方言について芸術上の判断をも同時にまじえながらきわめて詳細で豊
富な例文をともなった概観を示してくれる」(ロバート・H・ロビンズ、1967⁵⁾)。

以上のような言語学説の通史が一面の真理を伝えていることはもちろん否定
しえないであろう。しかしそれらはいずれも『俗語詩論』という著作の一断面
を示すにすぎず、作品全体を握把したうえでくだした判断であるとはいいがた
いのである。ましてダンテの全著作のなかに『俗語詩論』を位置付けた上での
判断にもとづいた理解からはほど遠いものと言わざるをえない。ダンテの「方
言学」も「近代言語学」の先駆と定義される「言語理論」もダンテのこの著作
の真の意図が不明であるかぎりには、その真価はついに理解されぬままに終るこ
とになるであろう。

事実ここで引用した学説史の一節はいずれも『俗語詩論』のなかで「一般言
語学的」問題をあつかった導入部分かもしくはロマンス語およびイタリア諸方
言を論じたいいくつかの章のみを対象としており、第2巻の「詩論」もしくは
「修辞学」の部分はほとんど問題にしていない。一方『俗語詩論』を「俗語の
適切かつ有効な表現方法」についての論考であるとみなし、「修辞学」に類す
る著作であるとみる人々は、第I巻の「言語学的」部分にはあまり関心をよせ
ないのがつねである。要するに前半から後半への(第I巻から第II巻への)論
理の展開が、うまく跡づけられず、両者のあいだに有機的な関係がみいだしに
くいということなのである。その結果『俗語詩論』はみじかい論考であるにも
かかわらず、内容がきわめて多義的で、一見統一に欠け、錯綜した印象をあた
えるというのが一般的な見解になっているようである。従来、全体で四巻にま
とめられる予定であったこの著作が第II巻のなかばで中断されたことがその理

4) R. H. Robins, *A Short History of Linguistics*, London, 1967, p. 99

5) *ibid.*, pp. 165-166

由であるというごく単純な説明でかたづけられて来た観がなきにしもあらずである。

しかしその理由はそれほど単純なものではないように思われる。『俗語詩論』の複雑さは、「高貴な俗語」の探求を目的とする「俗語の表現法」についての論考という表向きの意図とダンテの創作活動についての「自己注解」というかくされた意図との二重性から派生しているのではないかと想像される。そのような作品のもつ二重性を読みとるためには、まず全体の構想を十分に把握したうえで、原文の細部に移り、ふたたび全体の構成へという検証の往復運動をくりかえす以外にはない。その結果問題の細部は、作品のなかで正確に位置づけられるであろう。またその細部とダンテの著作全体との関係もできるかぎり明らかにされなければならない。この作業はとくにダンテのような作家には不可欠である。なぜならダンテの詩人としての特徴は、「たえず自己の創作活動を知的に把握し、文学的伝統における自己の位置を確定する欲求⁶⁾」にほかならないからである。それは「たえまなく詩の創作に技巧上の反省を加え、具体的な詩作と文体上の知見を結合させる⁷⁾」努力以外のなにものでもない。したがって「自己解釈」のもっとも重要な記録としての「詩論」は、ダンテの創作活動にともなうこうした反省の行為から生まれたのである。

第 I 章 言語の変化

1. 第 9 章の意義

『俗語詩論』は第 I 巻の終章（19章）に述べられているように全体で四巻にまとめられる予定の論考であったが、ダンテは第 II 巻14章のなかばで筆をおいている。章節の区分を無視して全体の論旨を追うと大略四つの主要な部分に分けられよう。すなわち、言語一般、俗語、イタリアの俗語、俗語による芸術的表現である。章節の区分けにより論旨の展開を追ってみると以下のごとくなる。第 I 巻の 1 章から 8 章までは、*locutio vulgaris* 「俗語の言語活動」の本質を明らかにした上で、主として伝統的な素材である「創世紀」に依拠しつつ言語の起源、言語の分化などの問題にふれている。10章から15章までは、「高貴な

6) Buck, 1965, p. 151

7) Contini, 1970², p. VIII

俗語」の潜在能力がもっともたかいと判断されるイタリア語に焦点をしばり、その方言を14に分類したうえで、各方言について検討を試みる。16章から19章まではそのような経験的方法によっては見出せなかった「高貴な俗語」を思弁論理的推理を援用しつつ演繹的に追求する。第Ⅱ巻の1章から14章にかけてはもっぱら「高貴な俗語」の芸術的表現としての「詩論」が展開される。9章は一見前半の部分にも後半の部分にもつながるので、従来「一般言語学的」導入部（1章—8章）と具体的な方言の検討（10章—15章）との橋渡しの役目を果たす部分とみなされてきた。この章が扱っているのは主として言語変化の問題である。しかし全体の論旨の展開を注意深く追っていくと、この章を単なる「つなぎ」とみなすことに疑問が生じてくる。以下では、全体の構成におけるこの章の位置付けを試みることにしたい。

2. 第Ⅰ巻第10章の解釈

第10章において論考の焦点は、「三形の言語」(ydioma tripharium), すなわちロマンス語の問題にしばられる。「三形の言語」とは「肯定の応え」として *oc* をもちいるスペイン人¹⁾ (=プロヴァンス人), *oil* をもちいるフランス人, *si* をもちいるイタリア人²⁾によって話される言語のことであり, これら三民族の俗語が「唯一かつ同一の言語から進化しきたった証拠³⁾」は明らかであるとする。ダンテはこの「三形の言語」が, 「三様の音体系からなっていることにもとづき⁴⁾」, 三つの言語を比較し, 優劣の順位をつけようというのである。いうまでもなくその目的は, すぐれた俗語の表現手段をこれらの言語に求めることにある。三者は容易に優劣をつけがたいほどそれぞれすぐれた資質をそなえている。しかしあえていえば「文法を組み立てた人」(gramatice positores⁵⁾) が肯定の副詞として “*sic*” を採用したことが, *si* といっているイタリア人に何分か有利な証拠である。さらに三者の優劣を比較考量し, オイル語は「きわめて流暢でかつ快美な性質をもつ俗語ゆえ⁶⁾」に散文にはとくにすぐれていて, オッ

1) Yspani: 第Ⅱ巻の12の3に「オックの俗語で詩作した人々をスペイン人と呼ぶ」(dico Yspanos qui poetati sunt in vulgari *oc*) とあるので, これをマリーゴのように文字通りスペイン人と解釈するのは無理であろう。

2) I, 8, 5.

3) “signum autem quod ab uno eademque ydiomate... progrediantur” (I, 8, 5)

4) “secundum quod trisonum factum est” (I, 10, 1)

5) Iwakura, 1984, p. 255

6) “propter sui faciliorem ac delectabiliorem vulgaritatem” (I, 10, 2)

ク語は「俗語の詩法に通じた詩人たちは、だれよりもさきにこの言語で詩作した⁷⁾」がゆえに卓越した言語であるという。一方 *si* の言語には二つの美点がみられる。第一に「こよなく優雅でかつ精緻に詩作したのは、たとえばチーノ・ダ・ピストイアとその友のようにこのことばに慣れ親しんだ者だから」(“quod qui dulcius subtiliusque poetati vulgariter sunt, hii familiares et domestici sui sunt, puta Cynus Pistoriensis et amicus eius”)であり、第二にこの言語が、「普遍的言語である文法に依拠するところが他に比して大であるため」(“quia magis videtur initi gramatice que comunis est”) (I, 10, 2) である。

この一節にはすぐれた俗語の表現法 (*vulgaris eloquentia*) の基本的条件とこの章以降で探求されることになる「高貴な俗語」の選定規準が明確に規定されているように思われる。イタリア語が優位に立つ理由としてダンテのあげた第一の命題は、「おのれの言語から離脱した」 *viri prehonorati* (栄誉に輝く詩人) であるチーノとダンテの言語と文体が、「高貴な俗語」の一つの指標であることを示している。*locutio vulgaris* の生得の潜在能力がこれらの詩人たちにおいて顕在化され、チーノは愛の詩人 (*dulcius*) としてダンテは哲学的詩人 (*subtilius*) として *eloquentia* の高峰に達したという現実の背景には、「シチリア派」からボローニャのグィニツェッリを経て「清新体派」にいたる言語と文体の伝統の継承という歴史的条件があることをここでダンテはすでに暗示しているのである。第二の命題の文中 *videtur* は、B 写本では省略され、GT 写本では、*videntur* となっており、多くの校訂者は GT 写本の読みを採用している。その場合主語はチーノとダンテということになる。しかし前後の文脈を十分に吟味すれば、この文の主語が数行まえの *terzia* (*lingua*) 「第三の (言語)」すなわちイタリア語であることは明白である。なぜならダンテはイタリア語が「高貴な俗語」の有力な候補であることの理由を二つあげ、二つの異った観点からこの問題を考察しようと試みているからである。第二の命題は第1の命題が歴史的条件の提示であったのに対し、実践的課題のための基本方針であると思われる。「永続的で不動の」(*perpetuo e non corruttibile*⁸⁾) ラテン語に特有な *lingua universalis* としての資質を「可能態」としてそなえているイタリア語に古典の正則を適用し、「文法」と同様な安定性を得させることによ

7) “vulgares eloquentes in ea (lingua oc) primitus poetati sunt” (I, 10, 2)

8) Conv. I. 5. 7

り、それを「現実態」に転化させようというのである。⁹⁾第Ⅱ巻の6章でダンテが「高貴な俗語」の構文を習得するためには、たとえばウェルギリウス、オヴィディウス、スタティウスなどの「正則を遵用する詩人たちに親しむことがおそくなにもまして有益であろう」¹⁰⁾と述べているのはそのためである。

言語の歴史的変化をあつかった第9章は、第一の命題と第二の命題の双方に深いかかわりがある。言語変化の原因が「きわめて不安定で変わりやすい」¹¹⁾人間の性質に由来すると考えたダンテは、そうした人間の性質をかえてポジティブなものと捉える。なぜなら人間が自由意志によって言語を恣意的に改変する (a nostro beneplacito reparare)¹²⁾ という性質には、「新しい言語」の創造というポジティブな方向にも働きうる側面のあることをダンテは重視したからである。第一の命題においてはこの自由意志にもとづく絶え間ない上昇の努力によって言語と文体の完成に向かった詩人たちの系譜をダンテはするどい歴史感覚をもって浮き彫りにする。一方、第二の命題によってダンテのいおうとしたことは、古典詩人の *exempla* の模倣を通して「新しい言語」を模索する実践の過程で、詩人たちは過去のすぐれた言語の実例を基礎にして、俗語に一定の法則をあたえ、「文法」と同様な安定性をその言語に附与することである。このようにダンテの言語思想において言語の歴史的変化という概念の占める位置はきわめて重要であり、その意味で言語変化をあつかった第9章は、全体の理論構成にとって不可欠な核をなすものであると考えられるのである。

3. ダンテの見解の独創性

ダンテはこうした言語変化についての考察の重要性を強調するかのように、

9) Ciascuna cosa studia naturalmente a la sua conservazione: onde, se lo volgare per sé studiare potesse, studierebbe a quella; e quella sarebbe acconciare sé a più stabilitade, e più stabilitade non potrebbe avere che in legar sé con numero e con rime” 「あらゆるものは生来自己の保存につとめるものである。俗語が自己のためにつとめるとすれば、保存につとめるはずである。保存とは自己をゆるぎない安定したものにするものであり、より安定させるには韻律によって自れを拘束する以外にない」 (conv, I, 13, 6)。

10) “... fortassis utilissimum foret ad illam (constructionem) habituandam regulatos vidisse poetas...” (II, 6, 7)

11) “instabilissimum atque variabilissimum” (I, 9, 6)

12) reparare は Blaise, *Dictionnaire latin-français des auteurs chrétiens* によれば renouveler (le genre humain détruit) の意味がある。たとえば una domus Noe remanserat ad reparandum genus humanum, Augustinus, *De ciuitate Dei*, 16, 12.

第9章の冒頭で、次のような抱負を述べている。

「これからは、自分の思弁の能力を験さなければならぬことになった。つまりいかなる学問の権威にも頼れぬ事柄について探求しようとするからにはほかならない」(I, 9, 1)¹⁾

ここでダンテはこれまであつかわれて来た言語の性質についての一般的な考察はかならずしも独創的なものとはいいがたいが、今採りあげようとする言語の歴史的変化という問題は、まさに人跡未踏の分野であり、それゆえに自分独自の見解を述べなければならないといっているように受けとれる。「いかなる権威にも頼れぬ事柄」とは「唯一かつ同一の言語の起源から派生した多様な分化」³⁾のことにほかならない。そこで言語の歴史的変化という普遍的な現象を理解するのにもっとも有効な方法は、経験にうらづけられた具体的かつ確かな知識を有する、自分に親しみのある言語の実例を通してこの現象を考察することである。なぜならある特定の言語にみいだされる現象は、論理的推理をはたらかせれば、他の諸言語にも共通なものであることがわかるはずだからである。この最後の文章の原文は、いずれの写本も次のようになっている。

nam quod in uno est rationale, videtur in aliis esse causa.

メンガルドの批判テキストは、これをそっくり採用しているが、このままではどうしても文意が通じない。筆者はライナの校訂にしたがい次のように読むのがもっとも適当であると判断した。

nam quod in uno est, rationa(bi)li videtur in aliis esse causa「なぜなら一つの言語にみいだされる属性は、論理的な理由にもとづき他の諸言語にもみいだされることは明白だからである」

この章でダンテの強調していることは、言語の歴史的変化という現象が普遍的な事実であり、新しい言語の創造の謎は、この事実の十分な理解なしには解きえないということにほかならないので、こうした文脈の内容から推しても上述

- 1) “Nos autem nunc oportet quam habemus rationem periclitari, cum inquirere intendamus de hiis in quibus nullius auctoritate fulcimur.” (I, 9, 1)
- 2) “...non solum aquam nostri ingenii ad tantum poculum haurientes, sed accipiendo vel compilando ab aliis...”「…巨大な器におのれの才智を注ぎ込むばかりではなく、他の人々からももらい受け集めて…」(I, 1, 1) という表明がたとえ修辞学的トポスであるとしても第I巻の1章から8章までの「導入部」についてダンテはとくに「権威」にたよった形跡がある。
- 3) “...hoc est de unius eiusdemque a principio ydiomatis variatione secuta.” (I, 9, 1)

の読みはそれほどダンテの真意からはずれているとは思えない。

ダンテにとって「慣れ親しんだ道」(*notiora itinera*) とは *ydiuma tripharium* にほかならない。ダンテはこの具体的な言語、なかでもイタリア語について言語変化の現象を考察しようというのである。この三形の言語が、バベルの塔の混乱のはじめには「一つの言語であったという事実は、詩作の大家たちが示しているように、多くの語いに関し共通するところがあるので明白である⁴⁾」。このように一つの言語が三つに分化したばかりか、その各々の言語でそれぞれ独自に分化し、イタリアに関していえば、アペニン山脈をはさんで東と西では異った方言がはなされ、各都市間に方言差がみられる。「さらに驚くべきことには、ボルゴ・サン・フェリーチェのボローニャ人とストラダ・マッジョーレのボローニャ人のように同一都市の住民のあいだにすら違いがみられる⁵⁾」ほどなのである。このような方言上の相違がどこから生じるのかが問われる。ダンテの応えは次のごとくである。

「われわれのすべての言語は……，先行の言語の忘却にほかならぬかの混乱ののちに、われわれが好き勝手につくりなおしたものであり、また人間はきわめて不安定で変わりやすいゆえに、言語は安定性も継続性もなく、たとえば伝統と習性のごとくわれわれに特有な他の諸現象と同様、空間と時間のへだたりにつれて変化すべきものなのである⁶⁾」。そして変化の要因としてとくに「時間」を重視する。「なぜならわれわれの他の営みをとくと観察するならば、われわれはもっとも遠方にある同時代人よりももっとも古い同国人と相違するところが、はるかに大きいように思われる⁷⁾」。「もしかりにもっとも古いパヴィーアの住民が現に生きかえったとすると、現在のパヴィーア人とは、ずいぶん開きのある、異ったたぐいの言語を話すことになるろう。わたしのいっていることは、その成長の過程をみなかったある青年がすっかり大人になっているのに気付くのと引

4) “...quod unum fuerit a principio confusionis...apparet, quia convenimus in vocabulis multis, velut eloquentes doctores ostendunt.” (I, 9, 2)

5) “...quod mirabilius est, sub eadem civilitate morantes, ut Bononienses Burgi Sancti Felicis et Bononienses Strate Maioris.” (I, 9, 4)

6) “... omnis nostra loquela ... sit a nostro beneplacito reparata post confusionem illam que nil aliud fuit quam prioris oblivio, et homo sit instabilissimum atque variabilissimum animal, nec durabilis nec continua esse potest, sed sicut alia que nostra sunt, puta mores et habitus, per locorum temporumque distantias variari oportet.” (I, 9, 6)

7) “...si alia nostra opera perscrutemur, multo magis discrepare videmur a vetustissimis concivibus nostris quam a coetaneis perlonginquis.” (I, 9, 7)

き比べて、さして驚くべきことではないように思われる。なぜならすこしずつ変化するものにわれわれは一向に気付かず、ものの変化に気付くのに時間がかかればかかるほどますます件のものは不動であると思われるからである⁸⁾。類似の考察が『饗宴』にもみいだされる。「注意して観察するならば、イタリアの諸都市で五十年この方、多くの語いが消滅し、生まれ、変化していることがわかる。それゆえ短い年月にこれだけ変わるとすれば、ながいあいだにははるかに大きな変化をこうむるのである。たとえばこの世を去った人々が、千年後に自分の故国に帰ったとすると自分のとは異った言語が話されているので、自分の故国に外国人が住んでいると思うにちがいない⁹⁾」。

このように言語変化を具体的かつ歴史的に把握した点が、『俗語詩論』の新らしさであるとしてブルーノ・ナルディは次のように述べている。『俗語詩論』においては言語変化の概念がスコラ哲学の著作家たちの場合とは異り、もはや抽象的な概念ではなく、具体的で、しっかりした根拠をもつ、歴史的な概念になっている。それはすなわち一民族の言語の歴史的生成という意識にほかならない¹⁰⁾。この説を受けつぎさらに発展させたのは、パリアーロであるが、諸言語の生成と言語事象の歴史性の認識¹¹⁾、社会的要因の強調がダンテの言語思想の現代性であることを力説している。パリアーロによれば、古代および中世の言語研究の大方にみられる欠陥は、諸言語を静止状態において考察し、発展として捉えることがなかった点である。この静的な視点は、体系を打ち立てる場合には、たしかに有効である。この視点にもとづき一方では言語形態の論理の考察に基礎をおく文法が生まれ、他方ではすでにヘラクレイトスにみられるごとく文章の論理構造を強調する古代の論理学が生まれた¹²⁾。

ダンテの言語観のなかでとくに注目を引くのは、人間と人間社会の変化にそ

8) ... "si vetustissimi Papienses nunc resurgerent, sermone vario vel diverso cum modernis Papiensibus loquerentur. Nec aliter mirum videatur quod dicimus quam percipere iuvenem exoletum quem exolescere non videmus; nam que paulatim moventur, minime perpenduntur a nobis, et quanto longiora tempora variatio rei ad perpendi requirit, tanto rem illam stabiliorem putamus." (I, 9, 7-8)

9) "Onde vedemo ne le cittadi d'Italia, se bene volemo agguardare, de cinquanta anni in qua molti vocabuli essere spenti e nati e variati; onde se 'l picciol tempo così transmuta, molto più transmuta lo maggiore. Sì ch'io dico, che se coloro che partiron d'esta vita già sono mille anni tornassero a le loro cittadi, crederebbero la loro cittade essere occupata da gente strana, per la lingua da loro discordante." (I, 5, 9-10)

10) Nardi, 1942, p. 190.

11) Pagliaro, 1956, p. 238.

12) *ibid.*, p. 219.

くして表現形態も変化するという言葉の性質を見抜いた点であるとするナルディ¹³⁾やパリアーロの見解に対して近年マリア・コルティは異議をとなえている。コルティによれば上述のような言語変化についての考察は、レストーロ・ダレツォにもみられ、ダンテの独創とはみなしがたいというのである。レストーロの『世界の成立ち』(“*Composizione del mondo*”)の問題の一節とダンテのテキストを引き比べてみると、コルティの指摘のごとくいくつかの類似点がみられ、ダンテがこの著作に依拠したことはほとんど確実であるといえよう。しかしさらにレストーロのテキストを検討してみると言語変化の要因という点でダンテとはかなりへだたりのある見解を示していることがわかる。問題の一節は次のごとくである。

「それゆえ異った伝統 (*rigimenti*), 異った習性 (*atti*), 異った言語をもたないようないかなる地方も都市も町も村落も存在しない。一都市の住民でさえ、伝統・習性・言語の点で異っており、その都市の一区域と他の区域とではたがいに相違した話し方をしている。千年たらずで自分の郷里に戻る人があったとすれば、自分のくにがわからないであろう。なぜなら山も谷も河も小川も泉も都市も城塞も町も人々の語ることばもみな変わってしまっているであろう」¹⁴⁾

コルティの指摘する通り、¹⁵⁾ この一節に『俗語詩論』のテキストの表現に酷似した個所がいくつかみいだされるのは事実である。言語変化を伝統と習性の変化と同類の現象として捉えている点、用語のうえでもダンテがくりかえしもちいている *mores et habitus* に呼応する *rigimenti e atti* という対句をもちいている点、一都市の区域間においてさえも言語上の差異が認められるという観察(ダンテはボローニャに例をとっている)、千年後に自国に戻った男の例などがそれにあたる。

しかしレストーロのテキストをさらに読み進んでいくと、言語変化を他のもろもろの自然現象の変化と同列におき、それらすべての変化の要因を天界の運行と様態 (*movimento e stato*) に帰していることがわかる。レストーロによれば、「天はその運行と様態に応じて地上に作用をおよぼすのであるが、そうした運行と様態は、一度として同一であることはないので、その多様性が地上の万物の変化の原因となっている。天は腕のよい^{たくみ}匠のように、その高貴さと知

13) Corti, 1981, pp. 56-58.

14) Restoro, 1976, II, 7,4, 24-25.

15) Corti, *op. cit.*, p. 57.

恵によって称賛をえんがために何らかの変化を加えずにはおかないのである。……したがって造り手が高貴であればあるほどそれだけ多くの原因が多種多様な事柄を生み出すのである。それゆえ大へん多くの作用と多様な原因によって世界には多様な言語が存在することになり、学識語と俗語の別を問わず音声と言語行為の多様な活動が必要となる。したがってギリシヤ語、ラテン語、ヘブライ語やその他の学識語があり、多くの民族には、たとえばギリシヤ人、アルメニア人、ドイツ人、イタリア人、サラセン人などのようにたがいに理解できない俗語の言語行為がみられるのである。それはいと高き神がその偉大さを多様な言語でほめたたえられるように、天界の多数の作用があるためなのである¹⁶⁾」。

以上の引用からも明らかなように、言語変化の要因を人間自体に求めるダンテの考えとレストーロの説明には共通点がみられないのである。おそらくダンテは単に現象としての言語変化を説明する目的でレストーロの興味深いたとえを借用したのであろう。したがってレストーロの一節とダンテのテキストとの類似は、単に表面的なものにとどまるように思える。

4. 言語の性質と「言語変化」

ここで第9章に展開される言語変化についてのダンテの見解を吟味することにした。ダンテは「いかなる結果もそれが結果である以上、その原因を越えることはない¹⁾」というアリストテレスの原理にもとづき、言語変化の原因をその使い手である人間に求める。別言すれば「いかなるものもそれがもともと内包しないものを結果として導き出すことは不可能であるから²⁾」人間自体に言語変化という結果が内包されているはずだというのである。人間は「きわめて不安定で変わりやすいゆえに」人間のあやつる言語も「継続性がなく、たとえば伝統と習性のごとくわれわれに特有な他の諸現象と同様、空間と時間のへだたりにつれて変化すべきもの³⁾」となるのである。

16) Restoro, *op. cit.*, II, 7, 4, 29-30.

1) "... nullus effectus superat suam causam, in quantum effectus est" (I, 9, 6) cfr. "... nullo effetto è maggiore della cagione, poi che la cagione non può dare quello che non ha." (Conv. II, 4, 14)

2) "... quia nil potest efficere quod non est" (I, 9, 6)

3) "... nec durabilis nec continua esse potest, sed sicut alia que nostra sunt, puta mores et habitus, per locorum temporumque distantias variari oportet." (*ibid.*)

言語変化は言語自体に内包されているがゆえに、言語の性質をダンテがどのように捉えていたかをまず明らかにしておく必要がある。言語行為の目的は何かといえ、*「われわれの心に抱く考えを他人に明かすこと」* (*“nostre mentis enucleare aliis conceptum”*) (I, 2, 3) にほかならない。この行為は人間にのみ必要なものであって、天使や人間に劣る動物には不必要であった。ダンテは聖トマスをはじめとする当時の多くのスコラ哲学者の意見に反して、天使は言語機能をもたないとしている。ダンテにとって天使は、『饗宴』で *“sustanze separate da materia, cioè intelligenze”* (II, 4, 2) と定義されているごとくに、非物質的な、知的な実体であり、知性がまったく透明状態にあるゆえにたがいに理解しあうために言語という媒介を必要とはしないのである。

これに対し人間に劣る動物の場合はどうかというと、「自然の本能によってのみ導かれるのだから言語能力をそなえる必要はなかった。事実同じ種族のすべての動物には同一の行動と情念がそなわっており、それゆえにおのれの行動と情念によって他のそれを知ることができるからである⁴⁾」。人間は天使と動物の中間的存在として位置づけられる。人間の知性は天使のごとく透明ではなく、「死すべき肉体の厚みと不透明さにおおわれている⁵⁾」のである。だからといって動物のように盲目的本能につき動かされるままに、機械的に行動するわけではなく、自由な理性にもとづいて生を営む。しかし人間の理性は、普遍的であると同時に特殊なものである。なぜなら人間の魂は創造されるやただちに神から潜在的知性 (*“intelletto possibile”*) を受けとる。それにはすべての人間精神に共通の普遍的形相 (*“forme universali”*) が刻み込まれている。したがっていかなる知性も普遍的形相を理解しうる能力をそなえているのである。しかしこの神から直接あたえられた知性は、あくまでも「可能態」 (*possibile*) としての資質であって、これを実践行動にさいして働かず場合、個人差が生じてくる⁶⁾。その結果「理性はほとんど各人がその固有な種を享受していると思わ

4) “...cum solo nature instinctu ducantur, de locutione non oportuit provideri; nam omnibus eiusdem speciei sunt idem actus et passioness, et sic possunt per proprios alienos cognoscere...” (I, 2, 5)

5) “...grossitie atque opacitate mortalis corporis humanus spiritus sit obiectus.” (I, 3, 1)

6) “La quale <l’anima>, incontanente produtta, riceve da la virtù del motore del cielo lo intelletto possibile; lo quale potenzialmente in sé adduce tutte le forme universali, secondo che sono nel suo produttore, e tanto meno quanto più dilungato da la prima Intelligenza è.” 「それ（魂）は創造されるやいなや天界を動かす方から知的能力をさずかる。それは普遍的形相を創造主のうちにあるがままに理解する能力をそなえ、原知性から遠ければそれだけそなわり方が少いのである」 (Conv. IV, 21, 5)。

れるほどに各個人ごとに認識、判断、選別の能力に関しそれぞれ異っている⁷⁾ことになる。それゆえ人間は各人他人が知らないと同時に普遍的な理性的性質に照らせば理解しうるような考えを心に抱いている。人間同志が心に抱く考え (“*conceptiones animae*”) をたがいに伝え合うことができるのは、一方に共通の理性的基盤があって、他方に心に抱かれた考えを表出する感覚的サインがあるからである。したがって言語は心に抱く考えと感覚的サインの統合にほかならない。

ダンテによれば、言語は「音声的しるし (*signum*)」であるが、それは「理性的かつ感覚的」 (“*rationale et sensuale*”) (I, 3, 2) なサインであり、このサインの性質は、音声が感覚の対象であるという点で感覚的存在であると同時に、音声と意味の統合が自然の必然によってではなく、人間の自由意志によって獲得される点で知的な実体である (「人間は、たがいに意志を伝えあうためには理性的かつ感覚的ななんらかのしるしを有する必要があった⁸⁾」; 「音声であるかぎりには感覚的なものであり、なにかを任意に表示するかぎりには、理性的なものであることは明らかである⁹⁾」)。ことばは任意に意味をあたえられた音声的サインであるという考えは、アリストテレスの『命題論』の「名辞は慣習的に意味づけられた音声である¹⁰⁾」という著名な一節にみられ、この考え方はボエティウスによって中世ラテン世界に紹介され、スコラ哲学者のあいだでは周知の思想であった。たとえば聖トマスにもしばしば類似の考えがみられる。「思うことを表示するのは人間にとって自然な行為であるが、意味内容 (*signum*) の規定は人間の任意にゆだねられている¹¹⁾」; 「ことばは任意に、すなわち人間の理性と意志の慣習にもとづいて表示する¹²⁾」。

この人間の「自由意志」 (*benepiacitum*) とは時代により、民族により、個人により必然的に異なる感情と慣習の総体にはほかならない。この自由意志のゆえ

7) “...ipsa ratio vel circa discretionem vel circa iudicium vel circa electionem diversificetur in singulis...” (I, 3, 1)

8) “Oportuit ergo genus humanum ad comunicandas inter se conceptiones suas aliquod rationale signum et sensuale habere...” (I, 3, 2)

9) “...sensuale quid est in quantum sonus est; rationale vero in quantum aliquid significare videtur ad placitum” (I, 3, 3)

10) “Ὀνομα μὲν οὖν ἐστὶ φωνὴ σημαντικὴ κατὰ συνθήκην...”, *Περὶ ἑρμηνείας*, ii, a 20

11) “...significare conceptus est homini naturale, sed determinatio signorum est ad placitum humanum.” (S. Theol. II-2, 85, 1 ad 3)

12) “...oratio significat ad placitum, id est secundum institutionem humanae rationis et voluntatis.” (Aristoteles *De interpr.*, lectio II)

に人間は自分の言語のつくり手となるのである。ダンテがこの点を強調するのは、自由意志こそ「新しい言語」の創造の原動力となりうるようなポジティブな側面をも含みもつ潜在能力であると考えたからにはかならない。

第Ⅱ章 「地方性」の超克 “a proprio divertere”

1. 方言分布についての考察

第10章の後半でダンテは論考の焦点をイタリア語にしばり、イタリアで行われている諸方言の吟味にうつる。それに先き立ちイタリア方言の地理的分布の状態が観察される。

イタリア語を他言語と分かつ境界線がアルプス山脈とみなされたのと同様に、イタリア内部で諸方言を右側と左側¹⁾に分かつ境界線はアペニン山脈が形づくとされる。ダンテはそれぞれの側に七つずつ、計十四の方言の分類を試みている。これら十四の方言のなかで西側（右側）の地域に属する話し手は、シチリア人、アプーリア人、ローマ人、スポレート人、トスカーナ人、ジェノヴァ人、サルデーニャ人であり、東側（左側）の方言群に属する人々は、カラブリア人、アンコーナ人、ロマーニャ人、ロンバルディア人、トレヴィーゾ＝ヴェネツィア人、アクィレイア人、イストリア人であるとされる。

ダンテの試みたこの方言分類が、現代の方言学からみて、どれほどの有効性をもつかについては種々の見方があり、論争の対象にもなって来たが、アスコリ以来この分類が比較的当時の方言分布の実状に近いことは、ほぼ一致して認められている²⁾といっていよいであろう。当時の政治上の区分に照らしてこの分類を検討してみると次の諸点が明らかになる。西側では、まずアプーリアと呼ばれている地域は当時アンジュー王家の支配下にあったプーリアであるが、そのすべてではなく、ガリリアーノ河からトロント河にいたる北の境界線までの地域をさしている。次にローマというのはラツィオをあらわし、スポレートは、ウンブリアの一部とサビーナをふくむスポレート候領のことである。それらにトスカーナもしくはエトルリア、ジェノヴァ境域もしくはリグーリアを加えて、西側の方言群が形成されている。一方東側では、プーリア王国の残りの部分、

1) イタリアを訪れる旅行者が、北からイタリアへ入ったときの視点にもとづき、右側（＝西側）とか左側（＝東側）とかいう慣わしがあった。

2) Vidossi, 1956, p. XLVII

ピチューノとウンブリアの一部をふくむアンコーナ境域、ロマーニャもしくはエミーリア南部、現在ロンバルディアと称される地域にエミーリアの一部とピエモンテを加えたロンバルディア、ヴェネツィアとともにトレヴィーゾ境域、ダンテ時代にはアキレイア総主教支配下にあったフリウーリ、それにイストリアを加えて東側の方言群が形成されている。そのほか島については、シチリア島とサルデーニャ島のみ（コルシカ島についての言及はない）が、西側のグループに加えられる³⁾。

西側の方言群と東側の方言群のあいだにはさらに多様な差異がみられ、その各々が「内部で分化をみせている」(in sese variantur) (I, 10, 7)。たとえばトスカーナではピサとアレツォのあいだに方言差がみられ、ロンバルディアではフェラーラとピアチェンツァのあいだに方言差がみられる。ボローニャのごときは、同一都市の内部で異った方言が行われているほどである。「世界のごくせまい一角でさえも千を数えるどころかそれ以上の言語の変種がみられるほど」⁴⁾方言の分化ははなはだしいというわけである。

2. *a proprio divertere*

第I巻10章から15章にかけてダンテはイタリアの地で話されている方言を十四に区分したうえで、それらを一渡り展望する。「森がちな山々や草原」にたとえられた諸方言のなかから芳香をはなつパンテーラ（高貴な俗語）を探り出そうというわけである。この「実験的な試み」は不成功におわる。これらの方言のなかには一つとして「高貴な俗語」の名に値するものが見当らないからである。その探索の途路ダンテはそうした方言から意図的に離脱した詩人たちを何人か数えあげていく。これらのすぐれた詩人の自国語からの「離脱」をあらわすのにダンテは *a proprio divertere* という表現をもちいている。しかもこの言い廻わしが5回も反復されていることは十分注目に値する。ソルデッロ・ダ・ゴイトについてもちいられた、*divertere* の同義語ともいえる *deserere* をそれに加えれば都合6回反復されることになる。ダンテがこの用語によって詩人たちの「地方性」の克服を意味しようとしたことは明白である。自国語からの離脱こそ超地方的で普遍的な言語の創造を目指す道だというのである。

3) Vidossi, *ibid.*

4) "...in hoc minimo mundi angulo non solum ad millenam loquele variationem venire contingerit, sed etiam ad magis ultra." (I, 10, 7)

神から万人にさづけられた *locutio vulgaris naturalis* 「生得の言語能力」を基盤として人間が、恣意的に実現する具体的な *lingua vulgaris* 「俗語」は、各地方語として行われている。人間はこの地方語を *proprium vulgare* として成長するがゆえに、「自分の俗語すなわち母語をなににもまして好ましく思う」 (“... pre cunctis proprium vulgare licetur, idest maternam locutionem”) (I, 6, 2) のである。それを好ましく思うのは、それが自分にもっとも近い俗語だからである “... lo quale(lo volgare proprio) è non prossimo, ma massimamente prossimo a ciascuno.” (Conv. I, 12, 6)。どの地方語も「可能態」としてはすぐれた資質をそなえているはずである。ところが大方の方言はそれをもちいる人間の恣意によってネガティブな方向にゆがめられている。そのような方言は、フィレンツェ方言のように *turpiloquium* であり、ローマ方言のように *tristiloquium*¹⁾ である。そうした方言のなかでダンテが比較的たかい評価をあたえたのは、ボローニャ方言であった。それは、ボローニャ人が周辺の方言から相対立する二つの要素を取り入れたために、その双方の特質が結合されて、柔和さと調和が生じたからである。²⁾ ボローニャ方言に対するダンテの肯定的評価からもわかるように、各方言のすぐれた要素を選びすぐって、俗語の有する「可能態」としての資質から最大の効力 “*virtù*” を引き出すことによって「新しい言語」を創造するためには、まず自己の方言からの脱脚が前提条件だというのがダンテの基本的な考えであることは明らかである。

以上の判断が正しいとすれば、ダンテは *a proprio divertere* という言い廻

- 1) *turpiloquium* も *tristiloquium* もダンテの造語であろう。前者は本来あるべき姿からゆがめられた、聞きぐるしい (*turpis*) 言語で、後者は耳にするだけで悪寒のするような不吉な (*tristis*) 言語であり、いずれも「伝統と習性がゆがめられている」 (*morum habituumque deformitate*) (I, 11, 2) というのである。すなわち言語の伝統も個人の言語習性も本来あるべき姿からはなれてしまっている。
- 2) “...Si ergo Bononienses utrique accipiunt,... rationabile videtur esse quod eorum locutio per commixtionem oppositorum ut dictum est ad laudabilem suavitatem remaneat temperata” (I, 15, 5)
- 3) “...nulla fa tanto grande quanto la grandezza de la propia bontade, la quale è madre conservatrice de l'altre grandezze; onde nulla grandezza puote avere l'uomo maggiore che quella de la virtuosa operazione, che è sua propria bontade... e questa grandezza do io a questo amico, in quanto quello elli di bontade avea in potere e occulto, io lo fo avere in atto e palese ne la sua propria operazione, che è manifestare concepata sentenza” 「生来そなわった資質ほどすぐれた長所はない。それが他の長所を生み出し、推持するからである。したがって人間の最大の長所は、人間生来の資質であるところの個有の素質にもとづく行為にはかならない。…心に抱かれる思想を表出するという個有の素質にもとづく行為において、「可能態」としてある、かくれたわが友なる俗語の生来の資質を「現実態」に引き出し、顕在化することによって、わたしは俗語の長所を生かそうというのである」 (Conv. I, 10, 7)。

わしをきわめて重要な判定の基準として意識的にもちいていると考えても、それほど的是はずれではないであろう。ここで *a proprio divertere* という言い廻しをふくむ各々の文について、その文脈とともに比較検討することにより、意味の異同をつきとめ、ダンテの真意を推察してみることにはしたい。

まずはじめにシチリアの詩人たちについてこの表現がもちいられる。“*eloquentes indigenas ostenderimus a proprio divertisse*” 「地元の詩人で卓越した人々が、おのれの俗語から離脱したことをわたしは明らかにした」(I, 12, 9)。ダンテがこの言い廻しを *ostendere* という動詞とともにもちいているのはこの場合にかぎる。事実ダンテはその他の地方に比べて、シチリアにもっとも多く紙数をさき、「シチリア派」の言語と文体について論じたのみならず、これらの「高名な巨匠たち」(*doctores illustres*) が輩出したフェデリーコ帝の宮廷のはたした政治的・文化的役割の重要性を強調しているのである。ダンテはこの *ostendere* という動詞をもって、超地方的な詩人の性格を具体的かつ歴史的な事実を通して十分に「証明した」のだということをいおうとしたのである。そこでは作者名をあげずに範例としてカンツォーネの四つの冒頭詩句が引用されている。すなわちグィード・デッレ・コロンネのものが二つ、ジャコモ・ダ・レンティーニとリナルド・ダクィーノのものが一つずつである。

次に *divertere* があらわれるのはトスカナ方言についての一節である。フィレンツェ、ピーサ、ルッカ、シエナ、アレツォの方言について一つずつ文例をあげ、トスカナ人の自慢の鼻をあかしたのちに、かれらのなかには俗語の優越性を体得した人が何人かいる (“*… nonnullos vulgaris excellentiam cognovisse*”) (I, 13, 14) として、四人の名があげられる。すなわちフィレンツェのグィード、ラーボ・ジャンニとその他の一人(ダンテ自身)およびピストイアのチーノである。これらの詩人は *virī prehonorati* と呼ばれ、おのれの俗語から離脱した (*a propria <loquela> diverterunt*) (I, 13, 5) と述べられている。この場合地元の俗語からの離脱が、「直接法完了形」によってすでに実現された行為として強調されている。トスカナの詩人にふれた一節には「けっして宮廷風の俗語を目指そうとしなかった」 (“*… nunquam se ad curiale vulgare direxit…*”) (I, 13, 1) 詩人たちの名もあげられる。すなわちグィットーネ・ダレツォ、ボナジュンダ・ダ・ルッカ、ガッロ、ピサーノ、ミーノ・モカート、ブルネット・ラティーニである。否定的な判断をくだ

された詩人の名がこのように多数つらねられているのは、トスカーナの場合のみであり、非常に興味深い（肯定的な評価をうけた詩人の数をうわまわる五人もの詩人である!）。これによってダンテがまえの世代、とくにグイットーネとその一派からの離脱を明示し、旗幟をいっそう鮮明にしておきたかったことがよくわかるのである。

動詞 *divertere* はまたファエンツァの詩人、トンマーソとウゴリーノ・ブッチョーラが “... *a proprio poetando divertisse audivimus*” 「詩作にさいして自分の方言から離脱したのを耳にしている」（I, 14, 3）という一節でもちいられ、またパドヴァのアルドブランディーノ・メッザバーティが “... *audivimus nitentem divertere a materno et ad curiale vulgare intendere*” 「自分の母語である俗語から離脱し、宮廷風の俗語を目指すべく努めるのを耳にした」（I, 14, 7）という一節でつかわれている。双方の場合とも *divertere* という用語が *audire* という動詞とともにもちいられている。ダンテはこの *audire* によって情報が間接的であることを示そうとしたか、あるいはこれらの詩人の詩が朗唱されるのを直接きいたということを意味しようとしたかそのどちらかである。ダンテとこれらの詩人との関係をみると後者の場合の可能性がたかい。⁴⁾ いずれにせよこれらの詩人にはいっさいの尊称は冠されず、「かれらのうちのあるもの」とか「かれらすべてのなかでただひとり」とかいわれているにすぎないところをみると、ダンテがかれらに積極的な評価をあたえているわけではないことは明らかである。とくにアルドブランディーノの場合には、「離脱」が単に「試み」であることが *nitentem* によって示されている。

最後に自分の俗語からはなれたボローニャの詩人たちが引用される。すなわちグイード・グイニツェッリ、グイード・ギズリエーリ、ファブルッツォ、オネストの四名である。ボローニャの俗語が「宮廷的かつ高貴な俗語と称される俗語ではない」（“Non ... est quod aulicum et illustre vocamus.”）（I, 15,

4) トンマーソ・ダ・ファエンツァはダンテ・ダ・マイアーノとのあいだに詩の遣り取りがあり、三篇のカンツォーネが例のヴァチカン写本 (Val. 3793) に収められているところから当時は相当に名のある詩人であつたらしい。ウゴリーノ・ブッチョーラはファエンツァの教皇派の主領の一人であつたアルベリーゴ・マンフレディ（『地獄篇』XXXIII, 118）の息子であり、ボローニャのオネストとのあいだに贈答詩がある。またアルドブランディーノ・メッザバーティは1291年5月から翌年の5月までフィレンツェのカピーターノ・デル・ポーポロをつとめ、ダンテのリゼッタについてのソネットに応答のソネットをかいているほどであるから、確実にダンテとは面識があつたにちがいない。以上の史実から判断すると、*audire* はダンテが直接にかれらの詩の朗唱をきいたということになる。cfr. Mengaldo, 1979, p. 115-n. 5および p. 119, n. 2.

6) ことを断定したのちにダンテは「もしそうだとすれば、(詩人たちが)自分の俗語から離脱するはずはなかったであろう」 (“*si fuisset, … nunquam a proprio divertissent*”) (I, 15, 6) と述べている。断定的な調子はトスカーナ方言の叙述にさいしてみられたのと変わりがない。ボローニャの詩人については、各詩人につきカンツォーネの冒頭詩句が一句ずつあげられている。

他の場合とはやや趣きを異にするソルデッロの場合のみが残された。前述のようにここでは *deserere* という動詞がつかわれている。ダンテはボローニャ方言が周辺の方言から多様な要素を取り入れたために他の方言よりはすぐれたものになったと述べるくだりで、その傍証としてそうしたことを個人でなしとげたソルデッロの名を引いているのである。ソルデッロは「きわめてすぐれた詩人であったにもかかわらず、詩の創作の場合のみならず、あらゆる表現手段において故国の俗語を放棄している」 (“*… tantus eloquentie vir existens, non solum in poetando, sed quomocunque loquendo patrium vulgare deseruit.*”) (I, 15, 2)。そのことは「ソルデッロがクレモナ、ブレッシャ、ヴェローナと境を接する出身地のマンドヴァ⁵⁾について示している通りだ⁵⁾」というのである。この一節については、多様な解釈が可能であり、いまだに決定的な説が出されていないのが現状である⁶⁾。ソルデッロに関する問題はきわめて興味深いにもかかわらず、他の場合とは同列に論じられないので、ここではこれ以上立ち入らないことにする。

divertere という用語をふくむダンテのテキストをこれまで比較考量してきたが、この動詞がいわば条件つきではなく、本来の意味においてもちいられているのは、シチリア人、ボローニャ人、トスカーナ人の場合のみであることが判明した。ダンテはこの用語によって、「地方性」を克服し、「宮廷風の」言語を目指した詩人の系譜を示し、「シチリア派」からボローニャの詩人へ、ボローニャの詩人から「清新体派」へと輝しい伝統が継承されていった事実を強調しようとしたのであろう。すなわちこれらの *eloquentes doctores* が知的・芸術的な絆で緊密に結ばれていることを証明しようとしたのである。一方方言探索の方はあたかもこれらの輝しい巨匠たちの晴れの舞台の引き立て役を割りふられているかの印象さえあたえる。

5) “...Sordellus de sua Mantua ostendit, Cremone, Brixie atque Verone confini...” (I, 15, 2)

6) Mengaldo, 1979, pp. 120-121, n. 1

3. 用語法を通して見た「共通項」

シチリア＝ボローニャ＝トスカーナという系列が明らかにされたので、次にこれら三者についてのダンテの評価の「共通項」を種々の用語の使用例の検討を通して見出すべく試みてみたい。

各地方の方言を離脱した詩人たちが目指したのはいうまでもなく「高貴な俗語」であるが、「高貴な」(*illustis*) という修飾語にあたえられた有名な定義が、第Ⅰ巻17章にあるので、まずその一節の引用からはじめよう。

“... *quod illustre dicimus, intelligimus quid illuminans et illuminatum prefulgens: et hoc modo viros appellamus illustres, ... quia excellenter magistrati excellenter magistrant;*” ; “*Et vulgare de quo loquimur et sublimatum est magistratu et potestate, et suos honore sublimat et gloria.*” 「*illustis* という用語によって光をおよぼすもの、そして照らされて輝くものを意味している。…それと同様に知力をもって輝き、すぐれた学問を身につけ、それをすぐれた教えによって他に広めるがゆえにある人々を *illustis* とわれわれは呼ぶのである」; 「そして本論の主題である俗語は、学問と知力によっておのれをたかめ、名誉と栄光によっておのれの一族をたかめるのである」(Ⅰ, 17, 2)。この定義において、ダンテの理想とした言語が、すぐれて知性的なものとしてとらえられていると同時に、その知的な言語が、蒙昧の闇にとざされている人々の蒙を啓く役割をになう強力な手段とみなされていることは明らかである。そのような言語は「具体的に」どのようにして創造され、またどのような詩人たちによって実現されるのであろうか?

学問を背景として高い芸術的表現に到達した一級の詩人たちをダンテは *doctores* と呼んでいる。シチリアの詩人たちについては「莊重にうたいあげた」

(“*graviter cecinisse*”) 「シチリア出身の数多くの大家」 (“*perplures doctores indigenas*”) の代表としてグィード・デッレ・コロネが引用されている¹⁾。またボローニャの詩人たちも「おのれの俗語からはなれた」 *doctores illustres* と呼ばれ、かれらは「俗語についてゆたかな選別の能力にめぐまれた人々」 (*vulgarium discretionem repleti*)²⁾ なのである。また三形の言語の代表格の詩人として「国際的な」レベルであつかわれるボルネイユ、ナヴァール王、グィニツェ

1) Ⅰ, 12, 2

2) Ⅰ, 15, 6

ッリも *eloquentes doctores* であり³⁾、「より完べきで甘美な俗語」(*perfectiori dulciorique loquela*)をもちいて作詩したのはプロヴェンスの一流の大家「ペール・ドーヴェルニュやその他のいにしえの大家たち」(“... *Petrus de Alvernia et alii antiquiores doctores*”) (I, 10, 2)である。

また *illustris* という「修飾語」はボローニャの詩人にも冠されている (… *qui doctores fuerunt illustres*) (I, 15, 6)。トスカーナの詩人たちが、*viri prehonorati*「榮譽に輝く人々」と呼ばれているのは、ダンテの判断によればこれらの詩人が「俗語の優越性を体得した」(*vulgaris excellentiam cognovisse*) (I, 13, 4)からにはほかならない。第I巻の17章にみられるようにこれらの詩人のなかでとくにチーノ・ダ・ピストイアとその友は、かれらの学問を背景として判断力を働かせ「高貴な俗語」を創造したのである。したがって *prehonoratus* が *illustris* と同じ含意をもつことは明らかである。

ではこれらの詩人がどのようにしてかくまで高次の芸術的表現を実現しえたのであろうか。チーノ・ダ・ピストイアとダンテ自身のカンツォーネにその創造の実例が示されている。

“Magistratu quidem sublimatum videtur, cum de tot rudibus Latinorum vocabulis, de tot perplexis constructionibus, de tot defectivis prolationibus, de tot rusticanis accentibus, tam egregium, tam extricatum, tam perfectum et tam urbanum videamus electum ut Cynus Pistoriensis et amicus eius ostendunt in cantionibus suis.”「イタリア人のもちいる多数の洗練されていない語いや多数の混乱した構文や欠点の多い多数の音声要素や多数の粗野なアクセントから、かくも高貴で明快で完べきで都会的な俗語が選りすぐられている(ピストイア人のチーノとその友人のカンツォーネに示されているごとく)のをみるにつけ、そこまでたかめられたのは、学問の力によってであることは明白である」。

イタリア各地の方言を構成する諸要素、すなわち *vocabulum*(語い)、*constructio*(構文)、*prolatio*(音声形態)、*accentus*(アクセント)の各々についてそれらが「可能態」として有している資質を「現実態」に転化させる能力 *discretio*

3) I, 9, 2

が、芸術性のたかい創作には要求されるのである。この能力は学問によって形成されるのである。ボローニャの詩人たちもまた「選別の能力にめぐまれていた」(*discretione repleti*) (I, 15, 6)

この選別能力は生来人間にそなわって⁴⁾はいるが、民衆にあってはしばしばこの能力がもちいられずに盲目な状態におかれている。⁵⁾なぜなら知的な能力の習性は短時日に獲得されるものではなく、ながい習慣によってのみ身につけることのできるものだからである。⁶⁾このように言語の知的な側面をダンテは重視するのである。また「地方的な」俗語から離脱することにより、詩人たちが目指す目標は、表現能力の発揮にほかならない。

"Quod autem exaltatum sit potestate, videtur. Et quid maioris potestatis est quam quod humana corda versare potest, ita ut nolentem volentem et volentem nolentem faciat, velut ipsum et fecit et facit?., 「それ(俗語)が表現能力によってたかめられることは明白である。また望まざるものを望むものに、望むものを望まざるものに変えるぐらいに人間の心を自在に動かす(それは俗語が過去においてもそうして来たり、現在においてもそうし続けているが)能力にまさる能力が存在するであろうか」(I, 17, 4)。

『饗宴』においてもダンテは同じことを述べている。「オルフェウスが立琴で野獣を馴らし、樹木や石をわが身に惹きつけたとオヴィディウスが述べるときその意味するところは、才智のある人がことばという手段をもちいて心のむごい人を柔順にし、屈服させ、学問と芸術に経験のない人々を意のままに動かすということである。知的な生活をもたぬかれらはあたかも石のようであるか

4) "Sì come la parte sensitiva de l'anima ha suoi occhi, con li quali apprende la differenza de le cose in quanto elle sono di fuori colorate, così la parte razionale ha suo occhio, con lo quale apprende la differenza delle cose in quanto sono ad alcuno fine ordinate: e questa è la discrezione." 「魂の感覚的な部分には眼がそなわり、それによって物体の外形に色合いがあるのに従って差異を見分けるのと同様に、魂の理性的部分にも眼が有り、それによってものごとには目的に応じた秩序があるのに基いて差違を見分けるのである。これが選別の能力にほかならない」(Conv. I, 11, 3)。

5) "De l'abito di questa luce discretiva massimamente le popolari persone sono orbate..." 「民衆はこの選別の能力の慣習を奪い去られている」(Conv. I, 11, 6)。

6) "...però che l'abito di vertude, sì morale come intelletuale, subitamente avere non si può, ma conviene che per usanza s'acquisti..." 「精神的・知的な能力の慣習はただちに身につけられるのではなく慣習によって得習すべきものである」(Conv. I, 11, 7)。

ら」。

こうした表現能力をダンテは、*eloquens* という用語によってあらわす。ボルネイユ、ナヴァール王、グィニツェッリなどの「国際級の」詩人たちは、*eloquentes doctores* と呼ばれ、「自分の俗語から離脱した」シチリアの詩人たちも *eloquentes indigenas* と称される。

またフェデリーコ帝のもとに集った官僚たちは、*corde nobiles*⁸⁾ と呼ばれるが、この名称はただちに *cor gentile* 「みやび心」を連想させる。それは血統による「貴族」ではなく、知的な高雅さをそなえた世俗的な知識人であった。自分自身をそうした知識人として位置づけたダンテが、その意味で「シチリア派」の *doctores* に格別の親近感を抱いたとしても不思議ではない。またシチリアの廷臣たちが “*excellentes animi Latinorum*”⁹⁾ と呼ばれるとき、一定の土地に束縛された視野のせまい “*municipalis*” 「地方的な」コムーネの人間に対比して、「超地方的な」、視野の広い国際人が連想され、かれらのもちいる言語が、*vulgare municipale* ではなく、*latium vulgare*¹⁰⁾ であることはもはや説明を要しないであろう。

以上述べたことによって明らかなように「シチリア派」、「ボローニャの詩人たち」、「清新体派」の三者には用語のうえからも多くの「共通項」がみとめられ、この三者を結ぶ絆が、はっきりと浮き彫りにされたと思われる。しかしさらに注意深く観察するとこの三者の絆は、数人の特定の詩人のあいだでの言語と文体の伝承に限定されるように思われる。つまりダンテ自身の歴史的・文学史的位置付けがダンテにとっては最大の関心事であり、その目的でシチリア派ではグィード・デッレ・コロネ、ボローニャの詩人のなかではグィニツェッリが最重要の詩人であり、かれらが一つの系譜をなしているように思われるのである。

7) “... Orfeo facea con la cetera mansuete le fiere, e li arbori e le pietre a sé muovere ; che vuol dire che lo savio uomo con lo strumento de la sua voce fa[r]ia mansuescere e umiliare li crudeli cuori, e fa[r]ia muovere a la sua voluntade coloro che non hanno vita di scienza e d’arte: e coloro che non hanno vita ragionevole alcuna sono quasi come pietre.” (Conv. II, 1, 3)

8) I, 12, 4

9) *ibid.*

10) I, 19, 1

4. 引用頻度と章節の配分

『俗語詩論』に引用される詩人とその詩句の数は決して多くないが、何人かの特定の詩人とその詩句がくりかえし引用されていることの方がむしろ注目される。こうした引用頻度もまたダンテの意図をさぐる重要な手がかりの一つと考えられよう。別表Ⅱのごとく言及される詩人はすべてで二十三名である。そのうち二名は名前をあげずに詩作品のみが引用されている（別表ではそれをマルカッコにより示す）。そのうちネガティブな目的、すなわち方言の「嘲笑」を目的として引用される詩人（カストラ・フィオレンティーノとチェーロ・ダルカモ）および「高貴な俗語」を目指さなかったトスカーナの詩人たち（ボナジュンダ、ブルネット、ガッロ、グィットーネ、ミーノ・モカート）をのぞくとポジティブな目的で引用された詩人は十六名のみにとどまる。それからさらに名前のみあげられ、作品の引用がみられない詩人（アルドブランディーノ・ゴット・マントヴァーノ、ラーポ・ジャンニ、トンマーソ・ダ・ファエンツァ、ウゴリーノ・ブッチョーラ、ソルデッロ）をのぞくと、わずか十名になる。十名の内訳は、三人がシチリアの詩人、四人がボローニャの詩人、三人がトスカーナの詩人ということになる。シチリアの詩人のうちジャコモ・ダ・レンティーニは名前はあげられずに1回だけ1篇の詩句が引かれているのみであり、リナルド・ダクイーノは、Ⅰ巻とⅡ巻で同一詩句が引用されているので詩句の数1，引用回数2回である。それに対しグィード・デッレ・コロネは、第Ⅰ巻で1回、第Ⅱ巻で2回引用されているが、第Ⅱ巻のうちの一つはすでに第Ⅰ巻で引用された詩句であるから、詩句の数2，引用回数3回となる。ボローニャの詩人についてはファブルッツォ、グィード・ギジリエーリは第Ⅰ巻と第Ⅱ巻で同一詩句が引用されているので詩句1，引用回数2となり、オネストは、第Ⅰ巻で1篇の詩句が1回引用されるにとどまるのに対し、グィニツェッリのみが第Ⅰ巻で2回、第Ⅱ巻で3回、第Ⅱ巻で引用される3篇の詩句のうち1篇は、第Ⅰ巻ですでに引用されたものと同一であるから、詩句の数4，引用回数5回という高い頻度を示している。トスカーナの詩人はどうかというと第Ⅰ巻ではどの詩人の詩句も引用されず、引用詩句はすべてⅡ巻に集中している。まずカヴァルカンティが都合3回、ただしそのうち同一詩句の引用があるので詩句の数としては2，チーノが都合3回、詩句の数としても3ということになる。一方ダンテ自身は、都合15回、同一詩句の反復引用がふくまれるので、詩句の数

は9という他と比較にならぬほど高い頻度である。ファヴァーティの指摘にもあるように、引用回数は、なんらかの意味でダンテのこれらの詩人に対する関心の高さに呼応すると考えることが許されるであろう。

また章節と内容との関係をしらべてみると図表Ⅰにみられるごとく、第11章はイタリアの右側についてローマからサルデーニャまでの諸方言を対象とし、第12章はすべてシチリアとアプーリアの記述に当たっている。第13章はほとんどがトスカーナ方言に関する記述に終始し、第14章はローマからヴェネツィアにかけて左側の方言を対象とし、第15章はほとんどボローニャ方言の記述にあてられている。12, 13, 15の三章が、それぞれシチリア、トスカーナ、ボローニャの方言および「高貴な俗語」の詩人たちに当てられているのに反し、他の11, 14の二章は、ほとんど、ネガティブな用例によって占められる。

第Ⅲ章 シチリアおよびアプーリアの詩人たち

1. 「シチリア派」の定義

ダンテは第Ⅰ巻12章の全部をシチリア＝アプーリア方言と「シチリア派」の詩人たちの記述にあて、多くの紙数をさいて詳述している。この章では「選抜の栄誉に値しない」地元の詩人との対比で、「地方性」を克服し「母国語から離脱した」すぐれた詩人が浮彫りにされる。ダンテはシチリアの俗語が、他の俗語にまさる名声を博した理由として次の二点をあげる。1)「イタリア人のつくった詩はすべてシチリアの詩と呼ばれている」(*quicquid poetantur Ytali sicilianum vocatur*)。2)「シチリア出身の数多くの詩人たちが荘重な文体でうたったことが知られている」(*perplures doctores indigenas invenimus graviter cecinisse*) (Ⅰ, 12, 2)。まず第一の理由であるが、「イタリア人によって作詩されたものは何を問わずすべてシチリアの詩と称される」とは一体何を意味するのであろうか。この疑問を解くためには引用文中の *poetantur* という用語の意味内容に注目する必要があると思われる。ダンテの用語法では「詩

1) Favati, 1975, p. 45.

1) 「シチリア派」(*la scuola poetica siciliana*) という名称は、「シチリア派」をはじめて学問的、総合的に捉えようと試みた“*La scuola poetica siciliana del sec. XIII* (1878) の著者である Adolf Gaspary によって採用されたものである。しかし「シチリア派」はダンテの“*quicquid poetantur Ytali sicilianum vocatur*”における *sicilianum*「シチリアの詩」という概念にきわめて近いと思われるのであえてこの名称をもちいることにした。cfr. Contini, 1960, Tomo I, p. 45

作の行為」をあらわす場合、格別の価値評価を含まないニュートラルな意味で *dire*, *versificari* が好んでもちいられているのに対し、*poetari* にはつねに肯定的評価がともない、とくに *doctores* の創作を他と弁別するために意識的にこの語がもちいられているという印象を受ける。次にあげるいくつかの例文がそのことを示している。

omnis qui versificatur suos versus exornare debet in quantum potest
「詩作をこころざすものはだれでもできるかぎり自分の詩文に装いをこらすべきである」(Ⅱ, 1, 2)

illustres viros invenimus vulgariter poetasse … 「高名な人々が詩作して来たことが知られる」(Ⅱ, 2, 8) 高名な人々とは、ベルトラン・ド・ボルン、アルノー・ダニエル、ギロー・ド・ボルネイユ、チーノ・ダ・ピストイアとダンテにはかならない。

qui dulcius subtiliusque poetati vulgariter sunt, hii familiares et domestici sunt … 「こよなく優雅でかつ精緻に詩作したのは、このことばに慣れ親しんだものたちである」(Ⅱ, 10, 2)。ここで「詩作した人々」とはチーノとその友である。

このように *poetari* に、「芸術的に第一級の詩作」という含意があるとすれば、さきに引用した文章の意味するところは「イタリア人で第一級の詩作を試みたものはすべて」ということになる。すなわち「自国語から離脱し」(*a proprio divertere*)「地方性」を克服し、「宮廷風な」共通文学語である *siciliano illustre* 「高貴なシチリア語」を目指したものは、その出身地のいかんを問わずシチリアの詩人というに値するというのである。現にジェノヴァ出身の Percivalle Doria やプラート出身の Compagnetto da Prato などが「シチリア派」に数えられている。この事実、フェデリーコ帝の宮廷がパレルモに定着することなく、たえずイタリア各地を巡回する類の宮廷であったことも深い関係があろう。

ダンテは「シチリア派」が隆盛をみた原因を文化史的、文学史的にあとづけたのち、ふたたびこの第一の理由を次のような形で反復する。

… factum est ut quicquid nostri predecessores vulgariter protulerunt, sicilianum vocetur; quod quidem retinemus et nos, nec posteri nostri permutare valebunt. 「われわれの先駆者たちが俗語で詩作したものはすべてシチリアの詩と呼ばれることになった。われわれもこの事実をしかと胸にとめおくのだが、後世のひとびともそれを変えることはありえないであろう」（I, 12, 4）。

ここでは動詞の *protulerunt* に関しては、特別な含意がないのに対し、*nostri predecessores* に力点がおかれていると思われる。「われわれの先駆者」とは「清新体派」の源泉となった「シチリア派」にほかならず、のちほど明らかにされるようにダンテ自身の文学的形がシチリア派の言語と文体の継承を通して行われたという事実にもとづくきわめて意図的な、自伝的底意のある呼称であると考えられる。

シチリアの言語が他の俗語にまさる名声を博しているもう一つの理由は、すでに引用したごとく、「シチリア出身の多くの詩人が荘重な文体で (*graviter*) うたったことが知られている」という点である。ここで *graviter* が、詩の形式のみならず内容にもかかわりをもつことは明らかである。第Ⅱ巻の4章で高貴な俗語をもちいるのは、「悲劇的文体」でカンツォーネを創作する場合であるとしている。そして「真に悲劇的な文体をもちいるのは、詩句の崇高さと構成の品格と語いの卓越が、思想の荘重さ (*gravitas sententie*) に調和している場合にかぎる²⁾」とされる。しかも最高の詩形式には11音節の詩句からなるカンツォーネがもっとも適しているとも述べられる³⁾。したがって「シチリア派」の名声をたかめたのは、こうした形式・内容にかなった創作を試みた最高の詩人がそのなかに数えられたからである。その一例としてグィード・デッレ、コロネの二篇のカンツォーネの *incipit* があげられる。この第二の理由においてダンテは、シチリアの詩人たちすべてがかならずしも完べきで理想的な創作を産出したわけではなく、そのなかでグィード・デッレ、コロネのようにかぎられた一定の詩人の功績が、シチリアの俗語をことさら有名にしたのだということを主張していると思われる。のちに引用される「シチリア派」の創始者

2) “Stilo equidem tragico tunc uti videmur, quando cum gravitate sententie tam superbia carminum quam constructionis elatio et excellentia vocabulorum concordat”(II, 4, 7)

3) II, 5, 3

と目されているジャコモ・ダ・レンティーニやリナルド・ダクイーノがこの最高の詩人のカテゴリーから巧妙に排除されていることは明らかである。

2. 「シチリア派」成立の背景とその言語的特性

ダンテはグィード、デッレ・コロネをはじめとする「シチリア派」の巨匠たち (*doctores illustres*) がなぜシチリアの地に輩出したのか、その原因をつきとめようとする。虚名をもとめるばかりの不名誉きわまりない現在の諸君主に引きくらべ、「フェデリーコ帝とその名にふさわしい子息マンフレディは、魂の気高さと清廉さをあまねく世に示し、命運のゆるすかぎり、低劣な行いを忌み、人の道にかなった生涯を送ったのである。それゆえ高潔で才智に恵まれた人々が、そうした君主たちの偉大さにあやかろうと努めたのであった。したがってその御世にイタリア人のすぐれた人材が創作したものはすべてまず最初にかくも偉大な君主の宮廷で日の目をみたのであった。皇帝の居所がシチリアにあったがために、われわれの先駆者たちが俗語で詩作したものはすべてシチリアの詩と呼ばれることになった¹⁾」。

「皇帝の居所がシチリアにあったがために」というダンテの言及は、シチリア派のような高度な芸術の産出に「制度的な」条件がいかに決定的な役割をはたしたかをみぬいた鋭い洞察がふくまれている。この一節には皇帝とその子息の政治的・文化的意図がはっきりと述べられており、皇帝の指導力がどのような形で²⁾ 宮廷の *doctores* に反映されていたかも読みとれるのである。周知のごとくフェデリーコ帝はボローニャ大学や自ら創設したナポリ大学出身の優秀な法曹家たちを宮廷に招いて要職につけ、王国の官僚制を強化し、ヨーロッパで最初に近代的「専制国家」を築きあげた。これらの宮廷の高官や宮廷貴族がシチリア派のメンバーであり、フェデリーコ帝を中心に詩の創作を通して王国の威信をたかめるのに貢献した。このようなコスモポリタンな政治的・文化的雰囲気の中で、イタリア各地の出身である詩人たちが、「共通の目的のために

1) “Fredericus Cesar et benegenitus eius Manfredus, nobilitatem ac rectitudinem sue forme pandentes, donec fortuna permisit, humana secuti sunt, brutalia dedignantes. Propter quod corde nobiles atque gratiarum dotati inherere tantorum principum maiestati conati sunt, ita ut eorum tempore quicquid excellentes animi Latinorum enitebantur primitus in tantorum coronatorum aula prodibat; et quia regale solium erat Sicilia, factum est ut quicquid nostri predecessores vulgariter protulerunt, sicilianum vocetur.” (I, 12, 4)

2) Iwakura, 1979, p. 24

自分の言語を離脱」することによって比較的均等の文化的 *koine* を目指したことは容易に想像しうる。そうした「シチリア派」の文学語の形成に多大な影響をおよぼしたのはラテン語とプロヴァンス語であった。ラテン語は、なかでもフェデリーコ帝の宮廷の書記局における書簡作成の技法 (*epistografia*) を通して、プロヴァンス語はいうまでもなく、宮廷に集まったトゥルバドゥールの詩作活動を通してこのシチリア方言を基盤とする文学的共通語の言語と文体にすくなくからぬ要素をもたらした³⁾。

スキアフィーニによれば「シチリア王国の統一かつ普遍的な精神を構成していたかのラテン思想にもとづく比較的均一な文化」を背景として、シチリア諸方言の統合がおこり、「それら諸方言は本来普及と統合の力をそなえ、あまりにも典型的であったり、あまりにも極端であったりする傾向をまぬがれ、諸地方語を平均化しつつ普及していった。そして文化の明白な表現としての様式化の過程をたどることになった」⁴⁾。

ダンテの引用するグィード・デッレ・コロネの詩の言語は、こうした均一化された文学的共通語の様相をあますところなく示しており、「もっとも賞賛にあたいる俗語となんら異なるところのないもの⁵⁾」と定義される。このカンツォーネの言語にシチリア方言の要素があまりみられず、トスカーナの文学語とのきわだった類似点が見出されるのは、この詩をわれわれに伝える現存の写本 (*Vaticano Latino 3793*) が13世紀末にトスカーナの写字生によって筆写されるさいにトスカーナ方言化されたためであるといわれる。推定によればダンテが手元において常用していた写本は、このヴァチカン写本にきわめて近いものである。しかし「シチリア派」の言語自体がまえにもふれたごとくすでに方言色を脱した一種の人為的な詩語として形成されたのであるとすれば、「高貴なシチリア語」は、地元の詩人たちがそれぞれ自分の方言から遠ざかることによってはじめて実現された文学のための共通語であるとするダンテの見解にはきわめてするどい洞察がふくまれていると考えなければならない。現代のロマンス諸語の詩の起源にかんする研究の成果は、奇しくもこのダンテの洞察に一致している。「シチリア派」にかぎらず中世にはそうした文学のための共通語が形成された例がまれではないが、ツムツールはこの種の言語の形成について以下

3) *ibid.*, p. 27

4) Schiffimi, 1953, p. 11

5) "...nichil differt ab illo quod laudabilissimum est" (I, 12, 6)

のような説明をあたえている。「ロマンス諸語の詩の言語の起源に関する最近の研究は、これらの言語が各々の自然の方言から直接に派生したものでも書き写されたものでもない、全く別のものであるという事実をつきとめている。それらはその出現の時点から（少くとも潜在的な）統一性、人為性、抽象性、といった諸特色をそなえている。その原因の由って来たところは、中世の精神の活力、創意、知的な活動を通して過去の遺産をシステムティックに活用する傾向が、きわめて多様な異国の影響の受容性と統合されたためである。このような伝統素地（sottotradizione）のモデルを忠実に再生することから画一性が生まれ、これが第二の段階である知的な詩の言語を形成する⁶⁾」。もしこれが事実だとすれば、トスカーナの写本のみによって今日伝承される「シチリア派」の詩の言語と原典のシチリア方言とのあいだには、人の想像するほど大きな本質的差異⁷⁾は存在しなかったのかもしれない。それにしても前世紀末から今世紀初頭にかけて、このまぼろしのシチリア語原典の復原の作業におびたしいエネルギーが消費されたものではある。

3. ギード・デッレ・コロンネとギニツェッリ

第12章で荘重な文体でうたった詩人として引用されるギード・デッレ・コロンネの詩句は以下のごとくである。

Anchor che l'aigua per lo foco lassi

（たとえ水が火によって…失うとも）

Amor, che lungiamente m'hai menato

（長らくわれを引き廻わせし愛神よ）

ダンテは第Ⅱ巻の5章で「思想の荘重さ」（*gravitas sententiarum*）を表現するのに他のどの詩句よりも11音節が適しているとみなしたうえで次のように解説する。「上掲の詩句（11音節句）が、他のすべての詩句のなかで当然のことながらもっとも著名なようにみえるが、つねにこれが大勢を占めさえすれば、7音節の詩句を数行組み合わせることにより、一段と光彩を加え、さらに格調

6) Zumthor, 1973, pp. 77-78

7) とくに E. Monaci や V. De Bartholomaeis のような一世代まえの学者にこうした意見がみられる。

のたかいものとなるように思われる¹⁾」。ところが *Anchora che l'aigua* というカンツォーネを検討してみると、各スタンツァは19行の詩句を擁しているが、19行中6行のみが11音節で、他は7音節句というむしろカンツォネッタに近い構成をとっていることがわかる。とすれば「思想の荘重さ」の一例としてこのカンツォーネが選択されたことは、ダンテ自身のたてた修辞学上の原則に明らかに矛盾している。あえて原則に違反してまで、ダンテがこのカンツォーネの選択をせまられた理由について考えをめぐらすのも無益ではないであろう。このカンツォーネが選ばれたのは、「むしろ趣味的な理由によるものであり、自伝的な、いわば自己正当化的な内面の衝動にもとづくものである²⁾」としたマリオ・マルティの考察は正しいといっていよいであろう。筆者の考えによれば、*maximus Guido* (グィニツェッリ) の作で「清新体派」のマニフェストともいえる *Al cor gentile* に靈感をあたえたこのカンツォーネの重要性をダンテはどうしても強調せずにはいられなかったのである。事実メッシーナの判事グィードとボローニャのグィードのカンツォーネには、主題のみならず文体においてもいちじるしい類似がみられる。

ここで二つのカンツォーネを比較検討してみることにしよう。まずグィード・デッレ・コロンネのカンツォーネから、第1スタンツァおよび第5スタンツァの数行の詩句をかかげ、検討を加えたのち、グィニツェッリの著名なカンツォーネを吟味することにしよう。

Anchor che l'aigua per lo foco lassi
la sua grande freddura,
non cangerea natura
s'alcun vasello in mezzo non vi stasse,
.....

ma Amor m'ha allumato
di fiamma che m'abbraccia,
ch'eo fora consumato

1) "Et licet hoc quod dictum est celeberrimum carmen, ut dignum est, videatur omnium aliorum, si eptasillabi aliqualem societatem assumat, dummodo principatum obtineat, clarius magisque sursum superbire videtur." (II, 5, 5)

2) Marti, 1967, p. 199

se voi, donna sovrana,
non fustici mezzana
infra l'Amore e meve,
.....

直訳：「水が火によって/ その非常な冷さを失うとしても/ 水は本性を変え
はしまい。/ もし仲立^{なかだち}に容器^{うつわ}がなければ。/ ……/ だが愛神はわたしに火を点
じ/ 焰はわたしを包み込む/ わたしは燃えつきていたろう/ 高貴なあなたよ、
あなたが/ 仲立^{なかだち}になってくれなければ/ 愛神とわたしのあいだにたって……)

La calamita contano i saccenti
che trare non poria
lo ferro per maestria,
se no che l'aire in mezzo le 'l consenti.
.....

l'Amor s'è apperceputo
che non m'avria potuto
traer'a sé se non fusse per voi;
..... (Poeti del Duecento I)

直訳：「学者たちの話によれば磁石は/ 磁力によって鉄を/ 引きつけること
はできないだろう/ 仲立^{なかだち}をする大気が同意せぬかぎり。…/ 愛神はあなたの力
をかりずには、/ わたしを己れに引きつけることは/ かなわぬことと悟ったの
だ……」。

このように自然現象を対象とする「自然科学的な」イメージに愛の現象学を対
置させたきわめて特異で斬新な手法が、グィニツェッリの詩にどのように反映
されているかを観察してみよう。第2スタンツァ全行および第3スタンツァの
数行を引用しよう。

Foco d'amore in gentil cor s'apprende
come vertute in petra preziosa,
che da la stella valor no i discende

anti che 'l sol la faccia gentil cosa;
poi che n'ha tratto fòre
per sua forza lo sol ciò che li è vile,
stella li dà valore:
così lo cor ch'è fatto da natura
asletto, pur, gentile,
donna a guisa di stella lo 'nnamora.

直訳：「愛の炎はみやび心に点っている/ あたかも太陽の清めを受けるまえには/ 星から通力の降ることのない/ 魔力が宝石にひそむように。/ だがのちに太陽はその力で/ 宝石の混りものを清め/ 星がそこへと通力を送り込む/ あたかもそのように大自然から/ 選ばれ、清められ、けだかくされた心に/ 星が宝石になすごとく/ 女性が愛を送り込む」。

.....

Così prava natura
recontra amor come fa l'aigua il foco
caldo, per la freddura.
Amore in gentil cor prende rivera
per suo consimel loco
com'adamàs del ferro in la minera.

(Poeti del Duecento II)

直訳：「あたかも水が熱い火にその冷さで/ さからうごとく悪しき自然は/ 愛心にはむかう。/ 愛神は己れの性状に似た場所であるがゆえに/ みやび心に宿るのである/ あたかも金剛石が鉄の鉱石にひそむように」。

ここでも sole:natura, vertute:amore, petra:cor gentile, stella:donna のごとく自然現象の比喩をもちいた対位法がみられるが、グィード・デッレ・コロンネのモチーフと手法を継承していることは明白である。ただしこの詩ではそうした愛と自然の現象がスコラ哲学流に **potenza** 「可能態」と **atto** 「現実態」の関係でとらえられている。すなわち宝石には「可能態」として魔力がひそんでいるが、太陽がそれを清めるときにはじめて星の力によって「現実態」に抽

き出される。それと同様愛はみやび心に「可能態」として宿るが、愛神がそれを選んで高貴にするときにはじめて女性の力をかりて「現実態」に転化される。また第3スタンツァにみられる *l'aigua: 'l foco* の対置が、メッシーナのグイードのカンツォーネの冒頭句から借用されていることは一目瞭然である。

グイニツェッリのこのあまりにも著名なカンツォーネは、血統の貴族性に対して精神の貴族性をうたいあげた「清新体派」のマニフェストにはほかならなかった。血統による貴族性に疑問を投げかけ、市民の個人としての倫理的・知的高貴さと愛とを同一視しようとするこの思想は、市民的 세계観にもとづく市民文化の宣揚であり、つきつめればコンティーニのいうごとく「ボローニャ大学に属する知的・中産市民階級の大胆な主張」³⁾にほかならない。なぜならグイニツェッリの詩的形成の背景にはボローニャ大学を中心とする先進的な知的環境があり、グイニツェッリの「愛の哲学」は、スコラ哲学の伝統と聖フランチェスコの神秘主義に新解釈をほどこしたものであったからである。「愛とみやび心」というテーマへのダンテの執心ぶりは、グイニツェッリの思想を敷衍した⁴⁾“*Amor e 'l cor gentil sono una cosa*”という『新生』のソネットや『饗宴』第4巻の論考などに明確にうかがわれる。またダンテのグイニツェッリに対する深い尊敬と傾倒のほどが、『新生』の *saggio*⁵⁾、『俗語詩論』の *maximus*⁶⁾、『饗宴』の *nobile*⁷⁾などにあらわされている。また『神曲』においてもなおグイニツェッリへの賛美が続けられる：「わが父にして、わたしより才^た長けたその他の人々の父⁸⁾」、「あなたの愛の詩は、俗語の使用が続くかぎりには、いつまでも世に⁹⁾もてはやされることでしょう」。ダンテはグイニツェッリから多大な影響を受けたが、なかでも青年期のベアトリーチェ賛歌の文体が、グイニツェッリに起源を発することは多くの学者が一致して認める点である。

3) Contini, 1960, tomo II, p. 460

4) *Amor e 'l cor gentile sono una cosa, sì come il saggio in suo dittare pone* 「愛とみやび心は同じもの/かの智者の詩に詠めると」(V. N., XX, 3)

5) 上掲のソネットでグイニツェッリを指していわれる *il saggio* (智者) とは、デ・ロベルティスによれば「グイニツェッリの学問的権威を強調しようとしたものであり、技と知の融合としてのまた『神曲』のウェルギリウスに体现された真理の伝道者としての詩人についての一般的な概念を暗示するもの」(De Robertis, 1980, p. 34) である。

6) I, 15, 6

7) “*sì come disse quel nobile Guido Guinizelli in una sua canzone...*” (Conv., IV, 20, 7)

8) “*...il padre/mio e de li altri miei miglior che mai*” (Purg., XXVI, 96-97)

9) “*Li dolci detti vostri, /che, quanto durerà l'uso moderno, /faranno cari i loro incostri.*” (Purg., XXVI, 112-114)

ダンテはボローニャの詩人たちを *doctores illustres* と呼んでいるが、グィニェッリはその最たるもの *maximus* である。ダンテがこの *illustis* という形容詞によって表わそうとしたことは、『俗語詩論』Iの17で述べられている通りである。すなわち *illustis* とは「光をおよぼし、光を受けて照らすもの」である。「知力をもって輝き……すぐれた学問を身につけ、それをすぐれた教えによって他に広める人々」を *illustres* と呼ぶのである。かれらは「自国語から離脱して」高次の芸術的表現の域に達したのであるが、その飛躍を可能にしたのは、「理性の光」と「学問の力」にほかならない。この意味からもグィニツェッリはダンテの理想にもっとも近い存在であったと思われる。「シチリア派」の言語と詩法の形成の背景にもボローニャの場合と類似した学問的条件が存在したことは、すでにふれた通りである。「シチリア派」の *doctores* がみなボローニャ大学やナポリ大学の出身であり、世俗的な教養を身につけた人々であったことを想起すれば、ボローニャやフィレンツェの詩人たちのかれらに対する親近感を理解するのはけっして困難なことではない。

原則を破ってまでグィード・デッレ・コロンネのカンツォーネをダンテに選ばせた理由について、以上の事実にもとづいて推量するとすれば、ダンテはこの選択の事実によってグィニツェッリの手になる「清新体派」のマニフェストに高い詩想を吹き込んだシチリアの「先駆者」のなしとげた仕事の意義を強調し、「シチリア派」とボローニャとフィレンツェの詩人たちを結ぶ太い絆の存在を力説することによって自分がその頂点に立つ権威ある文学的伝統の根拠を示そうとしたのだという結論に達せざるをえないのである。

グィード・デッレ・コロンネの作として引用されるもう一つの詩句 *Amor, che lungiamente m'hai menato* はいちじるしいガリシスムの傾向を示し、押韻のために反復してもちいられる *-anza* の語尾をもつ抽象名詞が、このカンツォーネにある種のエキゾティスムをとまなう洗練された雰囲気と高度な抽象性をあたえるのに役立っている。類似の文型の対置がいたるところにみられ、スタンツァの内部のみならず、スタンツァ間にも文体素の変異形を配して、絶妙な呼応の効果をあげている。要するにそうした数個の文体素とその変異形の組み合わせによってモチーフを反復する高度なマニエリスモの手法がこのカンツォーネの特徴となっている¹⁰⁾。このような文体上の技巧は、「シチリア派」の

10) Iwakura, 1984, pp. 285-290

詩人の到達した極限を示すものであろう。その意味でダンテのメッシーナの判事に対する評価は、同時に文学史的観点からみて客観的であるともいえるのである。

第一のカンツォーネ *Anchor che l'aigua* は、第Ⅱ巻6章で「構成のもっともすぐれた等級のもの」(*gradum constructionis excellentissimum*) と呼ばれる「国際級の」カンツォーネのカタログにのせられ、一方第二の *Amor, che lungiamente* は第Ⅱ巻5章で11音節の高貴なカンツォーネの一例として引用されている。この第5章および第6章にかかげられた「汎ヨーロッパ的」規模をもつ大作家のリストの双方に加えられているイタリアの詩人は、グイニツェッリ、チーノ、ダンテおよびグイード・デッレ・コロンネのみであることは注目に値する。このカタログにおいてもまたメッシーナのグイード——ボローニャのグイード——ダンテという系列が浮き彫りにされているからである。

4. ジャコモ・ダ・レンティーニとリナルド・ダクイーノ

アプーリアの地元の人々が「一般に品の悪い話しぶりをする¹⁾」のに対し、かれらのなかで「傑出した詩人たちは、その詩を吟味するものには明白なごともっとも格調の高い語いを折りまぜてそのカンツォーネをうたいあげ、立派な表現をもちいて²⁾いる」。そうした詩人の例としてジャコモ・ダ・レンティーニとリナルド・ダクイーノのカンツォーネの *incipit* が引用されている。

Madonna, dir vi voglio

(わが貴婦人よ、あなたのために歌おう)

Per fino amore vo si letamente

(まったき愛の力ゆえわれげに楽しき世を送る)

ジャコモ・ダ・レンティーニの詩句は、年代順に配置されているといわれる例のヴァチカン写本 (Vat. lat. 3793) の劈頭に位置することから、「シチリア派」のなかでもっとも早期の創作とみなされている³⁾。この詩人はフェデリーコ帝の宮廷に出仕する公証人であったため、ダンテは換称によって *Nota ro* と呼

1) "...terrigene Apuli loquantur obscene comuniter..." (I, 12, 8)

2) "...prefulgentes eorum quidam polite locuti sunt, vocabula curialiora in suis cantionibus compilantes..." (I, 12, 8)

3) Roncaglia, 1983, p. 2

ぶのを好んだ。ここでは故意にか、あるいはあまりにも著名な詩であるという理由によるか、作者名があがっていない。当時の記録文書はこの廷臣が1233年から1240年にかけて宮廷で活躍したことを示している⁴⁾ので、その詩作活動もほぼこの時期に対応するものと推定されている。ただしダンテがここでジャコモを大陸の出身としているのは誤りで、あるいは **Giacomo Pugliese** など他の大陸出身の詩人と混同した可能性もある。ジャコモが「シチリア派」の始祖とみなされているのは、この時期にかれがトゥルバドゥールの詩をイタリア語に移植する作業を通してイタリア抒情詩の基礎をきずいたからであり、かれの創作になる文体素が、他のすべてのシチリア派詩人の作品に継承されているからである。現にここで引用されたカンツォーネは、トゥルバドゥールのフォルケ・ド・マルセイユの詩の翻訳にほかならない⁵⁾。

ダンテのこの詩人に対する評価を正確に知るためにさきに引用した文をもう一度テキストにあたって吟味しなおす必要があるだろう。これらの詩人は “... *polite locuti sunt, vocabula curialiora in suis cantionibus compilantes* ...” 「宮廷風な語いを折りまぜてそのカンツォーネにもちいることにより、立派にうたった」のである。文中 *compilantes* は、かならずしも「肯定的な」評価をあらわすものではなく、むしろ創造性を必要としない単なる「技術」にかかわる作業を意味しているようである。ダンテは『俗語詩論』の冒頭で、この書物の執筆にあたって「巨大な器におのれの才智を注ぎ込むばかりではなく、他の人々からももらい受け、集めて…」(*accipiendo vel compilando ab aliis* ...)と述べているが、この場合も同様な用法であろう。現にウグッチョーネによれば “*Compilare est aliena dicta intermiscere, et hinc hic compilator*” 「*compilare* とは他人の言ったことを折りまぜることであり、そこからこの *compilator* という語ができた⁶⁾」ということである。したがってジャコモとリナルドはそうした技術を駆使して言語上の「卓越性」の境地に達した詩人だということのである。ジャコモがプロヴァンス詩の翻訳の仕事から出発したことを想えばまさにダンテの指摘通りである。このことはダンテとチーノ・ダ・ピストイアがカンツォーネにおいて成し遂げた成果と比較することによりいっそう明確に把握される。

4) Contini, 1960, tomo I, p. 49; Roncaglia, *op. cit.*

5) Roncaglia, *op. cit.*

6) Mengaldo, 1979, p. 25, n. 5

「イタリア人の用いる多数の洗練されていない語いや多数の混乱した構文や欠点の多い多数の音声要素や多数の粗野なアクセントから、かくも高貴で明快で完べきで都会的な俗語が選りすぐられている（ピストイア人のチーノとその友のカンツォーネに示されているごとく）のをみるにつけ、そこまでたかめられたのは学問の力によってであると思われる」(Magistratu quidem sublimatum videtur, cum de tot rudibus Latinorum vocabulis, de tot perplexis constructionibus, de tot defectivis prolationibus, de tot rusticanis accentibus, tam egregium, tam extricatum, tam perfectum et tam urbanum videamus *electum* ut Cynus Pistoriensis et amicus eius ostendunt in cationibus suis.) (I, 17, 3)

文中 *electum* (*eligere*) は *compilare* に対し, *discretio* 「弁別能力」にもとづいて最良の要素を抽出する高次の知的作業にほかならない。神にあたえられたがゆえに根本的には高貴な言語能力は、歴史的に実現された具体的な諸方言にあっては、潜在的なものにすぎない。方言のなかにひそむすぐれた要素を抽出する (*eligere*) ことは学問によって研ぎすまされた *discretio* をもって始めて実現しうる創造的行為なのである。以上の考察から「シチリア派」の詩人に対するダンテの評価がつねに一樣ではないことが理解される。

そればかりではない。ジャコモに関していえば、他の詩人たちが、すべて第Ⅱ巻の国際級のカタログに再度とりあげられているのに対し、この詩人の詩句の引用は、この場かぎりですべて一回にとどまる。また『煉獄篇』XXIV 歌の例のボナジュンタの告白にみられる「清新体の境地にいたれず公証人とグイットーネとわたしをつなぎとめる結び目 (*nodo*)⁷⁾」によっても、ダンテがジャコモを過去の世代に属する詩人とみなしていたことがよくわかる。ここでいわれている「結び目＝障害」(*nodo*) とは、清新体の詩境への飛躍をさまたげた「足枷」であり、この「桎梏」はジャコモ・ダ・レンティーニ、ボナジュンタ、グイットーネというネガティブな系列の構成を示している。この系列のアンティテーゼが、グイード・デッレ・コロネ、グイニツェッリ、ダンテであると考えすることはさほど無謀な臆測であるとは思われない。

ジャコモ・ダ・レンティーニの詩にはカンツォーネにとって不可欠な *gra-*

7) "... il nodo/che 'l Notaro e Guittone e me ritenne..." (Purg., XXIV, 55-56).

vitas sententiarum が条件を満たすほど十分にはそなわっていないという判断が、おそらくダンテのかれに対する否定的な評価を生んだ原因の一つではないかと推量される。実際にジャコモの詩の分析を通してこの事実をたしかめることにしよう。

Madonna, dir vi voglio は五箇のスタンツァからなり、各スタンツァは、各々16行の詩句を擁し、16行中4行のみが11音節で、他は7音節という構成である。一例として第4スタンツァの全文をかかげる。

Lo vostr'amore che m'ave
in mare tempestoso,
è sì como la nave
c'a la fortuna getta ogni pesanti,
e campan per lo getto
di loco periglioso.
Similmente eo getto
a voi, bella, li mei sospiri e pianti:
ché, s'eo no li gitasse,
parria che soffondasse
(e bene soffondara)
lo cor, tanto gavarà - in suo disio;
ché tanto frange a terra
tempesta, che s'atterra;
ed eo così rinfrango:
quando sospiro e piango, - posar crio.

(Poeti del Duecento I)

直訳：「わたしを捉える恋情は/ 嵐の海に漂うて/ あたかも舟のようだ/ 重い荷を嵐に遇って打ちやりつつ/ 打ちやりつつも逃れ去る/ 難所より。/ それに似てわたしは投げやる/ 美しいあなたに長息と嘆きをば。/ かく投げやらねばわたしの舟は、/ 沈むかにみえ/ (いや沈むであろう) / その想いの故に心はかくも重いのだろう/ かくて大地に打ち砕け/ 嵐は屈いだ/ かくてわたしもくず折れて/ 鎮まろうもの、長息と涙ののちに。」

筆者は以前にこのカンツォーネの分析を試みたことがあるので、その分析の結果をまとめた以下の文を引用することにしたい。「このカンツォーネ全体を通して観察するときまず気付く点は、シンタックス、意味上の対応関係が各スタンツァの内部においては多数みられるのに対し、スタンツァ間にはあまりみられず、有機的関連性を欠く。したがって各スタンツァの小モチーフが『じゅずつなぎ』になって直線的な展開をみせている。それに反しことばのイメージは非常にゆたかで、直喩の多用による『叙述的』展開をみせ、動詞が主要な役割を果す構文が目立っている⁸⁾」。前掲のグィード・デッレ・コロネのカンツォーネにもこうした意味上の対応関係が多くみられるが、それは「単なる同義語もしくは同じパターンのシンタックスの単純な対置によらず、微妙なニュアンスの違いをもつ同系の語いの厳密な選択により単調さを破り、シンタックスも、故意に異ったタイプを配置することにより、みごとなヴァリエーションの効果をあげることに成功している⁹⁾」。その結果ジャコモのカンツォーネでもちいられた「単純なタイプの直喩の例 (la nave c'a la fortuna getta ogni pesanti/ eo getto … li miei sospiri e pianti) に比べれば、このカンツォーネにおける *metafora* の構造がいかに意味・シンタックス上の変化に富むかは明らかであろう¹⁰⁾」。このようにジャコモとグィードを比較するとき、前者の詩が、比較的単純なタイプの直喩の多用により「叙述的」傾向を示すのに加えて、動詞の支配的な構文をもちいているという意味で「叙事詩」の文体に近い様相を呈している。したがってダンテの主張する「悲劇的」カンツォーネの「思想の荘重さ」からはほど遠い文体であることが理解されるのである。

同様に作者名をあげずに引用されている第二の詩句は、リナルド・ダクィーノの作である。この詩人は、デ・サンクティスが、その著名な『イタリア文学史』の冒頭で、素朴な民衆詩「十字軍兵の恋人の嘆き」の作者として紹介して以来いささか的はずれの名声を博してきた感がある。かれは *genere giullaresco* に属する民衆風な詩作をも手がけてはいるが、ここで引用されたカンツォーネのように、高度なマニエリズモの手法をこなした創作もすくなくない。

8) Iwakura, 1984, pp. 268-296

9) Iwakura, *op. cit.*, p. 276

10) *ibid.*, p. 282.

11) *ibid.*, p. 283

12) De Sanctis, 1954, p. 7 e sgg.

このカンツォーネは、第Ⅱ巻5章の11音節句のすぐれた詩句を集めた例の「国際的」カタログに再度引用されている。しかし前述のようにこの詩人に対するダンテの評価はそれほどたかくはないようである。

以上にみられるごとくダンテは「シチリア派」の詩人を無差別に賞揚したわけではなく、様々な限定を設けた上で巧妙な選別によってグィード・デッレ・コロンネに最高の地位をあたえ、自己の文学的立場を揺ぎないものとするための支柱としての役目を担わせている。しかしながらたとえダンテの選別の動機が「自伝的な」ものであったにせよ、グィード・デッレ・コロンネが「シチリア派」の文学の最高峰を示していることは文学史的に判断して客観的な事実であるといわざるをえないのである。

第Ⅳ章 トスカーナの詩人たち

1. 批判をうけた詩人たち

第Ⅰ巻13章の大半がトスカーナ方言とトスカーナの詩人の叙述に当てられている。注目すべきことはダンテが否定的判断をくだした詩人の名が五人もあげられ、肯定的評価をうけた四人の詩人よりも数において上廻ることである。他のいかなる方言についてもこのような例はみられない。まずその問題の一節を引用することからはじめたい。トスカーナの人々は「その狂気のゆえに心身喪失し、高貴な俗語の榮譽を不遜にも僭称しているように思われる。衆俗がこの見方に血迷っているばかりか、多数の著名な人士がそう主張していることをわたしは知っている。たとえばけして宮廷風の俗語を目指そうとしなかったグィットーネ・ダレッツォがそうである。そのほかボナジュンタ・ダ・ルッカ、ガッロ・ピサーノ、シエナのミーノ・モカート、ブルネット・フィオレンティーノなどがそれにあたる。かれらの詩作をたんねんに検討・吟味してみれば、宮廷風なものではなく、地方的なものにすぎないことがわかるのである」¹⁾。

従来この一節については、祖国を追放されたダンテが、母国語をあしざまに

1) "...propter amentiam suam infronti titulum sibi vulgaris illustris arrogare videntur. Et in hoc non solum plebeia dementat intentio, sed famosos quamplures viros hoc tenuisse comperimus, puta Guittonem Aretinum, qui nunquam se ad curiale vulgare direxit, Bonagiuntam Lucensem, Gallum Pisanum, Minum Mocatum Senensem, Brunectum Florentinum, quorum dicta, si rimari vacaverit, non curialia sed municipalia tantum inveniuntur." (I, 13, 1)

罵ってうっぷんを晴らしたのだという俗説がしばしばきかれるが、これがそのような感情に左右された発言ではなく、確固たる根拠と明確な意図にもとづいて述べられた一節であることは、注意深くテキストを読むものには自明なはずである。「高貴な俗語」は、再三繰り返えされたように地方主義の克服によってのみ達成されるべき目標であるにもかかわらず、一向にそれを目指すことなく、地方的なもの（*municipalia*）に甘んじて、おのれの言語を不遜にも自負してはばからないのがトスカーナ人である。そのような思い上がりを攻撃するのは、当然の理論的帰結であったはずである。しかしそれはあくまでも表面的理由である。なによりも名指してこのように激しく批判された五人の詩人がどのような規準にもとづいて他の多数のトスカーナ詩人のなかから抽出されたのであろうか。ダンテの真意を知るためには、ここで僭越な見解をいづく *famosos viros* として槍玉にあげられている五人の詩人の作品にあたって分析を試みるのみならず、ダンテとかれらとの関係を歴史的な状況のなかで解明する必要があるように思われる。そうすることによってのみかれらの欠点としてダンテが指摘する *municipalia* 「地方性」の意味するところも合わせ解明されることになるであろう。これら五人の詩人たちはいずれもダンテより一世代まえの詩派に属し、ダンテとその一派が超克すべき対象だったのである。五人のうちでとりわけギットーネがその標的であったことは明白である。「清新体派」の詩法、つきつめていえばダンテ自身の新しい詩法を確立し、それを定着させるには、一世代まえのギットーネを中心とするトスカーナの詩人たちの詩法に挑戦し、それにまつわる神話を打破することがダンテにはどうしても必要であった。コンティーニの指摘のごとく²⁾、その必要があったという事実こそギットーネの作風が当時なお「現代的意義」を有していたことを意味するであろう。

この間の事情は『煉獄篇』第 XXIV 歌でダンテとボナジュンタのあいだに
かわされる著名な対話にもはっきりと読みとれる。

…‘I’mi son un che, quando
Amor mi spira, noto, e a quel modo
ch’e’ ditta dentro vo significando”.

2) Contini, 1960, tomo I, p. 191

“O frate, issa vegg’io”, diss’elli, “il nodo
che ’l Notaro e Guittone e me ritenne
di qua dal dolce stil novo ch’i’odo!

Io veggio ben come le vostre penne
di retro al dittator sen vanno strette,
che de le nostre certo non avvenne;

「『愛神が靈感を吹き込むときに記し、
書き取らせるがままに写しあらず、
わたしはそんな詩人のひとりです。』

『おお兄弟よ』とかれ（ボナジュンタ）はいう 『なるほどわかった、
公証人とグィットーネとわたしが、今耳にする
清新体の境地にいたれず、はばまれていた理由が。
今こそよめた、君たちの筆は書きとらせるものの
口の動きにぴたりと寄り添うのに、わしらの筆には
ついぞそのようなことはなかった』」

はじめの三行詩においてダンテは、かれとかれの所属する詩派の詩法が従前のそれといかに相違するかを強調する。*I'mi son un* という表現によって、ダンテはこの詩法の革新の功績がかれのみのものではなく、かれの詩人仲間であるフィレンツェの「清新体派」に帰すべきものであることを語ろうとしている。このダンテの新しい詩法が神秘思想家のリッカルド・ダ・サン・ヴィットーレ³⁾の著作を典拠にしていることをはじめて明らかにしたのはカゼッラであった。問題の章句は以下のごとくである。“Solus proinde de ea <interiora suavitatis secreta> digne loquitur, qui secundum quod cor dictat interius, exterius verba componit...”「それゆえ心が心の内で書きとらせるがままに外にことばであらわすもののみが、それ（内面的な愛の甘美の秘密）を語るにふさわしいものである⁴⁾」。『煉獄篇』の件の三行詩とこの章句との類似は、あるいは偶然の一致である可能性もあろう。しかしダンテがこうした神秘思想をボローニャの文化的環境を媒介として、あるいはフィレンツェ時代のサンタ・クローチェ

3) Casella, 1934

4) *Tractatus de gradibus charitatis* 今日では F. Mazzoni によってその説は修正され、Ivo, *Epistola ad Severium de charitate* にふくまれる一節とされる。

僧院での勉強を通して吸収していたことは、疑念の余地がない事実である⁵⁾。愛の超越的な原理の確立は、個人的体験の内面化の過程を通してのみ実現されうるとするこの理論によって、ダンテはある意味でグィニツェッリの詩法さえ超克しえたといっても過言ではないであろう。この理論の形成には何らかの形でカヴァルカンティの詩法が力をかしたといわれる。「書きとらせるままに写しあらわす」という一節は、明らかに文体との関連でいわれてはいるが、同時に表現の技巧としての文体も、内面的な体験の深化によってのみより深い奥行を獲得するという事実の主張をふくんでいることはいうまでもない。

それに続く三行詩は、ボナジュンタのダンテに対する応えで、「清新体」の革新的な詩法に対して、伝統的な文学の系譜を示す「後進性」が強調されている。シチリア派の頭目であるジャコモ・ダ・レンティーニ、シチリア派のトスカーナ地方への移植者であるボナジュンタ・ダ・ルッカに加えてグィットーネ・ダレッツォというネガティブな系列に芸術的誠実さに欠ける技巧主義の傾向をダンテは指摘するのである。それこそ過去の詩法がその展開をはばまれた“nodo”（障害）にほかならないとする。

ダンテはかつてカヴァルカンティやラーポ・ジャンニの影響のもとにグィットーネとその一派の支配から脱し、かれらとの以前関係を清算しようと試みた。“E la cagione per che alquanti grossi ebbero fama di sapere dire, è che quasi furono li primi che dissero in lingua di sì”「詩作の妙を心得ぬ多くの詩人が詩作の技^{わざ}があるとして名声を博したのは、かれらがイタリア語で歌ったほとんど最初の人々であったからである」（『新生』XXV, 5）という表明には、漠然とした形ではあるが、すでにグィットーネ一派に対する批判的見解があらわされている。それに対し『俗語詩論』では、それらの詩人が名指しで列挙されることになる。すなわちグィットーネの一派としてボナジュンタ・ダ・ルッカ、ミーノ・モカート・ダ・シエナ、ガッロ・ピサーノ。それにブルネット・ラティーニまでが加えられている。この選択はやや奇異に感じられる。なぜならボナジュンタ、ブルネットなどの大物とともに群小作家ともいえる他の二名の詩人が加えられているからである。どうやらダンテは、例の修辞学的な対照法に忠実であろうとするため、方言の文例をトスカーナの代表的五都市から選んだのに呼応させて、詩人もこの五都市から選んだものと考えざるをえ

5) Davis, 1984, pp. 148-154

ない。すなわちフィレツェ、ピーサ、ルッカ、シエナ、アレツォの五都市である。かれらはいずれもギットーネとともに「語いや構文ともども低俗に墮する習癖を一向に改めようともせず⁶⁾」⁷⁾、「けっして宮廷風の俗語を目指そうとしなかった」詩人たちとされる。ダンテは一方ではパトヴァのアルドブランディーノ、ファエンツァのトンマーソとブッチョーラのごとくそれほど重要とも思えない作家を「自分の俗語から離脱した」例としてあげている。このような群小作家に対する寛容な態度に比して、ギットーネはいうにおよばずほとんど一党の頭目ともいいうるボナジュンタやブルネットのような重要な作家が、きびしい批判の対象となっているという事実は、それがダンテの「自伝的な」自己の立場の補強作業の一環であったことを推量させるに十分である。

2. ギットーネ・ダレツォ

『俗語詩論』の第Ⅰ巻13章にもどって、批判の対象となった五人の詩人について吟味しなければならない。まず筆頭のギットーネであるが、このアレツォの詩人はダンテが文学の道に入ったところシチリア派の伝統を継承しながら、同時にプロヴァンス詩の源泉に直接ふれることによって巾広い創作の境地を開きトスカーナでゆるぎない地位を占める巨匠であった。シチリア派が「愛」のみを詩のテーマとしたのに対し、ギットーネは、プロヴァンスの詩人たちにならって政治・道德・宗教をテーマとする詩の領域を開拓し、「愛の詩」についても、伝統的な女性像をコムーネの市民階級の環境に即応させることに成功した。要するにギットーネはシチリア派の閉鎖的で貴族的な詩法をコムーネの現実の要請に適合させる役割をはたしたのである。したがってかれは「清新体派」の隆盛以前ほとんど二十年（1260年から1280年にかけて）にわたりトスカーナでもっとも影響力のあった詩人といわれる。ギットーネが君臨していた時代に詩作活動を行った詩人でその詩にかれの影響が何らかの形であらわれていないような詩人は一人もいなかったとさえいわれるほどであった。ダンテも例外ではなかった。むしろ初期のダンテは「清新体派」の他のどの詩人よりもギットーネの作風に近い詩作を試みたのである。それはギットーネ派のダンテ・ダ・マイアーノとかわした応答のソネットにもはっきりとあらわれてい

6) “...nunquam in vocabulis atque constructione plebescere desuetos” (II, 6, 8)

7) “...nunquam se ad curiale direxit.” (I, 13, 1)

1) Pellizzari, 1906, pp. 122-123

²⁾る。こうした初期の「見習い」の期間を経たダンテは、グィニツェッリに「遭遇」し、カヴァルカンティに啓発され、次第に新しい詩風に移行し、グィットーネの影響から脱脚する。さきに引用した『煉獄篇』の数行の詩句にみられるごとく、のちにダンテは「清新体派」をグィットーネのアンティ・テーゼとして歴史的に位置付けるにいたるが、この公式は客観的にみてかならずしも正当なものとはいえない。なぜならグィットーネはたしかにプロヴァンスの詩人をモデルにはしていたが、修辞学的な文飾については、同時代の修辞学の伝統から多くを学びつつ、そうした修辞学上の規則をまもることによって13世紀の言語をシチリア派のそれから一段とたかめ、プロヴァンス詩の文体をものぐまでにみがきをかけたという意味で、まさに「清新体派」への道を開いたといえるからである。³⁾そればかりではなく、詩に哲学的な内容を導入したという点でもグィットーネは「清新体派」の先駆者であるといえるのである。⁴⁾したがってダンテのグィットーネ批判には多分に心理的、「自己防衛的」要素があることは疑いの余地がない。

グィットーネとともに古い詩法を打破するためには、何をおいてもグィットーネを攻撃せざるをえなかったのである。それはグィットーネのみをたかく評価しようとする人々の風説を封じ込め（「無知の信奉者は、…グィットーネ・ダレッツォや同類のやからをもちあげるのはやめるがよいのだ」⁵⁾）、自分たちの詩の革新に人々の注意をふり向けなければならなかったからであり、ダンテとその仲間たちもまた信奉者を獲得する必要があったからにはほかならない。そうした意味で、「清新体派」の運動は、過去の世代への反抗という形をとる。それは革新派がまえの世代の詩派に理論闘争を挑むことによってとげられるのである。次に引用するソネットに読みとられるごとく、カヴァルカンティのグィットーネに対する攻撃の内容は、ダンテが『俗語詩論』でグィットーネを非難したのと根本的には相通じる根拠にもとづくものであると思われる。

Da più a uno face un sollegismo:
in maggiore e in minor mezzo si pone,

2) Marti, 1971, pp. 73 e segg.

3) Buck, 1965, p. 149

4) Buck, *ibid.*

5) "Subsistant igitur ignorantie sectatores Guitttonem Aretinum et quosdam alios extollentes" (II, 6, 8)

che pruova necessario senza rismo;
da ciò ti parti forse di ragione?

Nel profferer, che cade'n barbarismo,
difetto di saver ti dà cagione;
e come far poteresti un sofismo
per silabate carte, fra Guittone?

Per te non fu giammai una figura;
non fòri ha'posto in tuo un argomento;
induri quanto più disci; e pon'cura,

ché 'ntes' ho che compon' d'insegnamento
volume: e fòr principio ha da natura.
Fa' ch'om non rida il tuo proponimento!

(Poeti dul Duecento II)

「三段論法は多くの前提から一つの結論を抽き出し、
大命題と小命題のあいだに中間のをはさむ、
詩で飾らなくとも証明は成り立つものだ。
こんなきまりからはずれる君には何か理窟があるというのか。

言い廻わしに不体裁なところがあるのは、
君に教養が不足しているためだ。
グィットーネ法師よ、詩文をものして
詭弁を弄するのはさぞ面倒なことだろう。

君には詩人としての個性があったためしはない。
君自身の独自の見解をみせてくれたこともない。
学問をするほどに君の頭はかたくなる。気をつけたまえ。

話によれば君は指南の書なぞをものすそうな。
そいつは根っから土台のない代物だろう。
君の目論見が人さまの笑い草にならんようにしたまえ。」

このソネットが一見難解なのは、テキストの一部が後半で破損しており、復原が困難であることにも由来するが、実はカヴァルカンティが意図的にグイットーネの晦渋癖（プロヴァンス流の ‘trobar clus’）をまねることによってその手法のパロディーを試みているからにはほかならない。カヴァルカンティは、まず冒頭の4行でグイットーネが論理学の初歩的手続きさえ心得ていないことをなじり、それに続く4行では、グイットーネの詩の形式上の不備をつき、その原因は教養の欠如にあるとまできめつけている。『俗語詩論』の第Ⅱ巻第6章にみられるダンテの批判（「語いや構文ともども低俗に墮する習癖を一向に改めようともせぬグイットーネ⁶⁾」）は、まさにカヴァルカンティの非難に呼応するものである。さらにこのソネットの後半では、グイットーネには詩人としての個性（‘una figura’）が欠如していることが指摘され、そのような詩人が修辞学の手引書をつくるなどとは片腹痛い向う見ずな企てだと冷笑されている。

このソネットでは、たとえばアレツォ方言の特徴を示す *poteresti*（7行目）によりグイットーネの *municipalismi* がほのめかされ、*disci*（11行目）によってグイットーネ好みの *latinismi* が暗示されるなど、揶揄を目的としてグイットーネの語法が故意に模倣されている。また冒頭句にみられる *sollegismo*（= *sillogismo*）は、*solecismo*（破格）をあてこすった *amphibology* にほかならないであろう⁷⁾。

カヴァルカンティのソネットにはグイットーネの詩法に対立するものとして「新しい詩法」が、明確な形で提示されているわけではないが、グイットーネ批判を通して自己の詩的理想を暗示したともみられるであろう。カヴァルカンティがグイットーネの詩に *barbarismo* をみてとり、無個性な技巧主義を指摘したとすれば、この非難とは逆のことこそカヴァルカンティおよびかれの一派の詩的理想であったと考えるべきであろう。

3. ボナジュンタ・ダ・ルッカ

ボナジュンタ・オルビチャーニ・ダ・ルッカは、従来の学説によればグイットーネ派の詩人でグイニツエッリおよび「清新体派」に敵対する立場をとったとされていたが、最近の伝記的研究（地元の公文書によればボナジュンタの公

6) cfr. 前章の n. 6

7) Favati, 1975, p. 78

証人としての活動の記録はもっぱら1242年から57年にかけて集中している)により、グイットーネよりはまえの世代に属することが明らかにされた。実際かれの様式にはとくにグイットーネ風な傾向はみられず、むしろその内容、文体ともにシチリア派に近く、なかでもにジャコモ・ダ・レンティーニの模倣が目立ち、キアーロ・ダヴァンツァーティのソネットにその剽窃をあてこすったものがあるほどである。そのほかチェーロ・ダルカモやエンツォ王の作風を彷彿とさせるような作品を残している。ボナジュンタのこうした傾向から、シチリア派のトスカーナ地方への移植者としての姿が浮き上がって来たのである。しかもボナジュンタは移植にさいしてその作品に地元の言語的傾向を反映させている。たとえばピサ・ルッカ方言の特徴である *z>s* (*partenza* に対する *partensa*, *senza* に対する *sensa*, *allegrezza* に対する *allegressa* 等); *str>ss* (*vostro* に対する *vosso*) がみられ、²⁾ 言語的な *municipalism* が少なからず見出される。『煉獄篇』の XXIV 歌でダンテがボナジュンタにいわせる例の “O frate, issa vegg’io...nodo” の *issa* (*istra*)³⁾ も典型的なルッカ方言の語いである。

しかしダンテの非難はかれの言語的地方性にのみとどまるとは思われない。ボナジュンタの手がけた作品には *canzonetta* や *generi a ballo* といったジャンルのものが多く、カンツォーネの場合もコンティーニの指摘のごとく⁴⁾ 『俗語詩論』でダンテが悲劇的要素が低いとしている7音節ではじめられるものが圧倒的に多い。したがってジャンルの選択、ひいてはそうした「喜劇的」傾向の文体による言語成果にダンテは「けっして宮廷風の俗語を目指そうとしなかった」ボナジュンタの「地方性」を看取したのであろう。

しかしながらダンテがボナジュンタに非難の矛先をむけたのは、何よりもかれがグイットーネの詩法の確立に決定的な役割をはたしたからにほかならないと思われる。なぜならグイットーネはシチリア派の伝統を継承しつつ、その詩法の形成を行ったさい、シチリア派から直接に素材を得たというより、むしろボナジュンタの仲介を通してその仕事を成し遂げた可能性が十分あるからである。⁵⁾ このような経緯を理解すれば、なぜダンテが『俗語詩論』においても『煉

1) Contini, 1960, I, Chiaro Davanzati XIV, p. 430, cfr. *ibid.*, p. 257

2) Rohlfs, 1966, §. 266

3) *Enciclopedia dantesca*, *issa* (*istra*)

4) Contini, 1960, I, p. 260

5) *Enciclopedia dantesca*, IV, p. 182

獄篇』においてもグィットーネ批判にあたってボナジュンタをつねにそのかたわらにすえなければならなかったかがわかるのである。

4. ガッロ・ピサーノとミーノ・モカート

ガッロ・ピサーノは、ガレットとも呼ばれる13世紀後半の詩人である。市の有力な地主であったアニェッロという人物の息子でガッロという人のことが市の記録文書に残っているが、もしこれと同一人物であるとすれば、判事であったはずである。ただし残存するカンツォーネの作者名に通常判事などの場合にそえる“ser”という呼称がみられないので別人である可能性もある。現在 *Laurenziano Rediano 9, Vat. 3793, Palatino 418* に収められている2篇のカンツォーネのみが伝承されている。*In alta donna ho miso mia 'ntendenza* を incipit とするカンツォーネはシチリア派風であり、もう一つの *Credeam'essere, lasso* ではじまるものは、グィットーネ調である。言語的には、*avansa, altessa* などの語にみられるごとくピサ方言の要素が濃厚で、*più* に対する *piò* の形のごとくトスカーナ方言の特徴をあらわしている。この形はグィットーネややはりピサ出身でガッロに应运¹⁾て *Serventese* をかいたグァラッカにもあらわれている (“*piò puro c'oro matto*”)。

ミーノ・モカートは13世紀のシエナ出身の詩人で、*Vat. 3793* に収められた1篇のカンツォーネの作者 *Bartolomeo Mocati* と同一人物と推定される。同一のカンツォーネが不完全な形で *Palatino 418* にも収められているが、*Monaco da Siena* の作となっている。*Non pensai che distretto* を incipit とするこのカンツォーネは *plaszenza, misuranza, possanza, intendenza* 等 *-anza* で終わる語尾をもつ語がおびただしく数えられるなど語いの上で *provenzalismi* がきわ立っている。事実部分的に *Raimbaut de Vaqueiras* から敷き写したもののようである。²⁾ なおボッカッチョの「デカメロン」第10日、7話に引用されているバッラータ、*Muoviti, Amore, e vattene a Messere* が *Mico da Siena* の作ということになっている。このバッラータをミーノ・モカートの作と考える人もいるが、³⁾ やはりこれはボッカッチョの創作であろうと思われる。⁴⁾ ガッロ・

1) Contini, 1960, I, Gualacca II*, 57, p. 291

2) Enciclopedia dantesca, III, p. 261

3) Penvini, 1962, I, p. XLVIII e 452-53

4) *Decamerone*, a cura di Branca, pp. 1171-1172

ピサーノとミーノ・モカートのごとき群小作家がリストに加えられたのは、前述のごとくグイットーネの “ignorantie sectatores” 「無知の信奉者」(Ⅱ, 6, 8) の代表者をピサとシエナからも捻出する必要があったからであろう。

5. ブルネット・ラティーニ

ブルネット・ラティーニ (c. 1220-1294) は、公証人ブォナコルソ・ラティーニの子としてフィレンツェに生まれ、かれ自身も公証人として市の政治に積極的に参画した。1260年フィレンツェの教皇派は、マンフレディ帝と皇帝派対策に苦慮し、教皇派であったラティーニをカスティリアのアルフォンソ十世のもとへ援助を乞うために使節として派遣した。かれ自身がその作品 “Tesoretto” において語るところによれば、徒労に終わった使節の帰途ロンスヴァルでボローニャから来た学生に出会い、モンタペルティの戦いで教皇派のこうむった惨敗についてきかされ、イタリアに帰えることを断念し、フランスにとどまった。かれの起草した文書によって1263年から1264年にかけてアラス、パリ、バール・シュル・オーブなどを点々としたことが知られている。1266年マンフレディがベネヴェントで大敗を喫したのち、ただちにフィレンツェにもどり、政治活動を再開している。ラティーニはフィレンツェ市の行政において数々の要職につき、弁論家として多数の聴衆を集めた。1287年には市の長官に就任し、ジョヴァンニ・ヴィッラーニの記述によれば、1294年に他界した。フランス亡命中にフランス語で執筆された百科全書的な中世の知識の集大成である *Tresor* 『大宝典』、イタリア語による詩の小品 *Tesoretto* と *Favolello*、キケロの『創作について』 (*De inventione*) をイタリア語に移して、詳細な注解をほどこした『修辞学』 (*Rettorica*) などがラティーニののこした作品である。「(ブルネットは) フィレンツェの人々の教養をたかめ、かれらを上手な話し手に仕立てあげ、政治にもとづいてわが共和国を指導し、統治する能力を身につけさせた最初の人にして師範であった¹⁾」というジョヴァンニ・ヴィッラーニのことばからも明らかなように、ラティーニの学問および修辞学の教師としての活動が、政治を主たる目的としたものであったことが理解される。

しかしこのラティーニの名声は、やはり『神曲』のあまりにも有名な挿話に

1) “...egli fu cominciatore e maestro in digrossare i Fiorentini, e farli scorti in bene parlare, e in sapere giudicare e reggere la nostra repubblica secondo la politica.” (Cronica di Villani, 1823, tomo III, p. 22)

由来するといえよう。自然にそむいた男色者たちの群のなかにはからずも恩師ブルネットの姿を見出したダンテは、かれとながいが対話をかわすことになる(『地獄篇』, XV, 22-114)。この一節には、かつての師に対する深い情愛と感謝の念がみなぎっている。かつて今の自分と同じ境遇におかれたことのあるラティーニの口から同郷人の忘恩と流罪の身についての予言を告げられたダンテは、不屈な自尊心と強靱な倫理感の高揚をあらたにおぼえるのであった。ダンテは現世での恩師のなつかしい教えにふれて次のごとく述べる。

ché 'n la mente m'è fitta, e or m'accora,
la cara e buona imagine paterna
di voi quando nel mondo ad ora ad ora
m'insegnavate come l'uom s'eterna:
e quant'io l'abbia in grado, mentr'io vivo
convien che ne la mia lingua si scerna.

「先生が折にふれ現世で
人のとこしえに生きる道をお教えくださった
あの時の優しさにみちた慈父の面影が
しかと頭にきざまれていて、今胸にせまってまいります。
それがどんなに嬉しいことか
生あるかぎり世の人に語り伝えることにします」

(『地獄篇』 XV, 82-87)

ここでふれられているラティーニの「教え」の内容については、種々な解釈が成り立ちうるであろう。ウンベルト・ボスコの²⁾ようにラティーニの教えは、あくまでも倫理的・政治的側面に限定されるという意見もあるが、ダンテはラティーニから文学上の指導も受けたと考える学者も少なくない。ヴィッラーニの証言を別の角度から読み直してみるとラティーニは、ただ単に政治の用具としての「修辞学」の教師であったというふうにはとれないのである。ラティーニの『修辞学』は、有徳の報酬として名誉にあずかることが、真の貴族的高潔さであるとみなされていた古代ローマの理想を範にとり、修辞学と弁論家の使命

2) Bosco, 1979, Inferno, p. 220

は、市民に正義と理性にもとづく生活を嚆矢することにあるとする。そうした意味でラティーニの『修辞学』は、ただ単にトリヴィウムの学芸の一つというより、さらに幅の広い人間としての、市民としての教養といった広範な知的領域を包含する論考なのである。「ことば」の力によって人間は、獣性から解放されるというラティーニの基本的な思想は、まさに「ことば」とその活性的な力に対する信頼感にもとづくものにほかならない。このように「ことば」を理性的なものとして認識することこそダンテがラティーニの思想から学び、継承したものであった。³⁾したがって“come l'uom s'eterna”「人のとこしえに生きる道」とは、ことば＝表現の力によって自己の名声を不朽にするという意味であると思われる。こうした信念が、コムーネの文化的・政治的体験に由来するものであることは明らかである。

市の政治活動に参画するためには「修辞学」の習熟が不可欠の条件であったことはいうまでもない。ダンテも政治活動の体験から“ars dictaminis”の効力を熟知していたにちがいないのである。ラティーニによって提示された政治のための強力な手段としての散文や口頭弁論のための表現法の理論が、コムーネの支配階級の形成を目的としていたことは、ヴィラーニの記述からも十分にうかがい知れる。しかしこうした理論の有効性は、あくまでもコムーネの市民文化の限界内にとどまるものであった。ダンテはラティーニと共通な思想と体験から出発しながらも、すでに「帝国」の構想を抱いていた『俗語詩論』執筆当時には、むしろこうした市民文化の限界の克服を理論の中心にすえるようになっていた。⁴⁾したがってダンテは上述のような文脈において恩師ラティーニをもグイットーネとともに「地方的な」作家と規定せざるをえなかったのであろう。

文学的創作に限定してラティーニの傾向を吟味すれば、かれがダンテの理想とする「悲劇的」文体を彫琢することではなく、もっぱら「喜劇的」文体を手がけたことは明白である。たとえば *Tesoretto* と *Favolello* は、両者とも7音節句で完全押韻 (*rima baciata*) というアルカイックな韻律を示しており、もちいられた言語もテーマも古い世代に属するものであった。加うるに『饗宴』の第I巻11章で「他国の俗語を称揚し、自国語をおとしめるあやまった考えの人

3) De Robertis, 1970, pp. 218-220

4) Iwakura, *op. cit.*, pp. 238 e sgg.

々」の「消えることのない不名誉」⁵⁾を攻撃したダンテが、フランス語でかけられた『大宝典』にはたして肯定的評価をあたえることができたかどうか疑わしい。ラティーニのそのような自国語に対する態度にもダンテは限界をみてとり、過去の世代の文学的因襲として排除すべき要素をみいだしたのではなかろうか。ラティーニ批判の場合にもまたダンテの体験に裏づけられた思想の変遷と成長のあとがはっきりと読みとれるのである。ダンテの批評精神の原動力は、自己と他者との可動的な関係をたえず点検・修正しつつ、歴史の流れのなかに自己の現在占める位置を模索し、確めようとする強い欲求にほかならない。

したがってラティーニの場合もグイットーネの場合も、批判が単なる「趣味的」な感情に左右されているのではなく、文化史的系譜のなかにかれらをいかに位置付けるかというさしせまった問題に発していることは明らかであろう。さきに引用したカヴァルカンティのソネットでグイットーネは三段論法すら上手につかひこなせず、論理学の教養のないことを揶揄されているが、そこにはファヴァーティの指摘するような文化的背景があったと考えられる。⁶⁾すなわち論理学や思弁文法学がつとに専門の学者ばかりではなく、ボローニャ大学を中心とする文化的環境に一般の教養として滲透しつつあった当時、グイットーネがそうした新しい文化の流れからとり残されていたといたという事実が強調されているのである。それにもかかわらず指南の書を執筆し、それが世間に通用すると自負しているグイットーネの時代感覚の欠如が問題であり、何よりも文化の流れのなかで自分の位置づけができていないという点が非難に値するといえるのであろう。カヴァルカンティやダンテの最大の関心事がかれらの新しい運動の歴史的位置付けであってみれば、これこそかれらのグイットーネ批判に格好な口実となりえたであろうということは想像にかたくない。

5. 肯定的評価をえた詩人たち

チーノ・ダ・ピストイアとカヴァルカンティ

第Ⅰ巻13章でトスカーナ地方の地元の人々が口にする方言的表現を批判したのち、ダンテはほとんどすべてのトスカーナ人がこうした「ゆがんだ言語」(turpiloquium)に麻痺しているのに「俗語の優越性を体得した人をわたしは

5) "...perpetuale infamia e depressione de li malvagi uomini d'Italia che commendano lo volgare altrui e lo lore proprio dispregiano..."(Conv. I, 11, 1)

6) Favati, 1975, p. 80

何人か知っている¹⁾」という。すなわちギード・カヴァルカンティ、ラーポ・ジャンニおよびダンテ自身である。それにフィレンツェ出身ではないチーノ・ダ・ピストイアを加えて、これら「ぬきんでて榮譽に輝く詩人たち²⁾」について一言をついやさなければならない。

前述のようにダンテはここでは詩人たちの作例を一篇も引用していないので、他の章、とくに第Ⅱ巻の5章および6章の詩人たちの作品カタログを検討する必要がある。ラーポ・ジャンニについては、すでに述べたように、全巻を通じて一篇の詩も引用されていない。まずチーノとダンテについてみると、第Ⅱ巻の第5章に11音節ではじまる詩句の引用されるところで、いわば国際級の大詩人 *doctores* (ギロー・ド・ボルネイユ、チボー・ド・シャンパーニュ〈ナヴァール王〉、グイニツェッリ、ギード・デッレ・コロネ、リナルド・ダクイーノ) の詩句とともにチーノとその友 (*amicus eius*) が登場する。同じくその6章で、「最高の構成」(*suprema constructio*) の模範的な作品があげられているところでは、前章のカタログよりもさらに多くの詩人が引かれているが、そこでもまたチーノとその友が加えられている。ただしこの場合カヴァルカンティの詩句も引用されている。このほか第Ⅰ巻の10章で他のロマンス語に比してイタリア語の優位が説かれるくだりで、チーノとその友が、例によって対になって、「こよなく優雅でかつ精緻に詩作した」(*dulcius subtiliusque poetati vulgariter sunt*) 詩人としてあらわれている。この一対の形容詞は、知的に哲学的に深く表現することにより愛の概念を内面化させる「清新体派」の傾向をもっともよく体現している。ブックにしたがえば「清新体派」は、「スコラ哲学の心理学の用語と神秘主義的語いをもちいることにより詩的伝統から受けついだ言語と韻律をゆたかにかつ高貴にすることを目指し、精神的な風土のなかで表現をより芸術的に高雅なもの³⁾とすることに成功した」のである。

チーノ＝その友という対は、第Ⅰ巻の17章に再び見出されるが、そこではこの二人の詩人がそのカンツォーネにおいてすでに実現した俗語の高揚が語られている。このようにチーノへの言及が多いのに対してカヴァルカンティがそれほど重視されていないのがむしろ印象的である。カヴァルカンティが当代の詩人中もっとも注目すべき人物の一人であったことは疑いもない事実だったからで

1) "...nonnullos vulgaris excellentiam cognovisse sentimus." (I, 13, 4)

2) "viri preonorati" (I, 13, 5)

3) Buck, 1965, pp. 151-152

ある。現にダンテ自身もカヴァルカンティの詩法から愛の心理分析の手法の多くを学びとっているのである。それにもかかわらずダンテがつねにカルヴァカンティの様式をやや敬遠するきらいのあったこともまた否定しえぬ事実である。⁴⁾おそらくそれには心理的要因の働いていたことが想像される。すでに『新生』の XXIV 章でダンテはこの友に強い対抗意識を抱いていたことを明らかにしており、そこにはこの先輩格の友人が将来ダンテによって凌駕すべき運命にあることがきわめて神秘的な語り口で予言されているからにはほかならない。

ダンテのつねとしてカヴァルカンティとの関係においても年の経過とともに微妙な変化がみられるのはむしろ当然のことといえよう。しかしとくに1295年のダンテの政治活動への参劃の時期を境として友情に亀裂が生じたように見受けられる。ジャーノ・デッラ・ベッラの「正義の規定」の緩和により、ダンテは市の政治に参加することになるが、きわめて有力な市の豪族の出であったカヴァルカンティには政治上の要職に着く道がなお閉されていた。際立って貴族的なカヴァルカンティの眼には、友人の市の民主政治への協力、文化的な転向とも政治的な裏切りとも映ったことであろう。ダンテは敵対に終始し、一向に生産的ではない派閥政治にみきりをつけ民主政治への接近をはかったのである。同時に洗練をきわめた、貴族主義を標榜するかたわら、根本的には冥想的で、生活から遊離した文化を背景とする詩作からは脱却することになる。そうした文化と詩を人生に接近させ、倫理的意識の規範に即応させる方向へダンテはすでに歩み出していたのだともいえよう。フォーレーゼ・ドナーティとの「口論詩」のやりとりもちょうどその時期にあたるものと想像される。この「口論詩」はそれ以前のダンテには考えられないようなほとんど突然の「現実派的な」詩作への試みであった。この一連の詩作には伝統的な文学上の定形には依然として忠実でありながら、以前の観念的態度を脱して民衆への接近をはかろうとする作者の姿勢が読みとれるのである。カヴァルカンティがダンテに次のソネットを贈ったのもそうした時期であったと想像される。

I' vegno 'l giorno a te 'nfinite volte
e trovoti pensar troppo vilmente:
molto mi d'òl della gentil tua mente

4) *ibid.*, p. 153

e d'assai tue virtù che ti son tolte.

Solevanti spiacer persone molte;
tuttor fuggivi l'annoiosa gente;
di me parlavi sì coralemente,
che tutte le tue rime avie ricolte.

Or non ardisco, per la vil tua vita,
far mostramento che tu' dir mi piaccia,
né 'n guisa vegno a te, che tu mi veggi.

Se 'l presente sonetto spesso leggi,
lo spirito noioso che ti caccia
si partirà da l'anima invilita.

(Poeti del Duecento II)

「日に何度となく心は君のもとに赴く。
君はすっかり塞ぎ込んでいるではないか。
あの君の高貴な心は、あれほどの気魄は
いまどこに、それがわたしには辛く忍びない。

君は群衆を毛嫌いしたものだ
月並な連中をいつも遠ざけたものだった
わたしの気持ちを自分のもののように語ってくれた
だから君の詩は全部大切にしまったものだ。

いくじのない君の生活を目にした今となっては
君の詩が好きなどと暖気にも出す気にならない。
君を訪ねて顔を合わすのもごめんだ。

このソネットをくり返えし読むならば
君を駆り立てているやっかいな憑き物も
いくじのない君の魂から立ち去ることだろう。」

このソネットによってカヴァルカンティは、かつては高踏的で「群衆を毛嫌い

した」ダンテが、「衆愚政治」に手を染めたことをあてこすり、フォーゼ・ドナーティのごとき「月並な連中」と交際したりすることをなじるのである。かつては自分の完全な理解者で、「わたしの気持を自分のもののように語ってくれた」友は、共通な理想のもとに友情のかたい絆で結ばれていたあの「清新体派」の団結から今では離れ去ろうとしている。今のダンテの詩作はお世辞にも感心したものとはいえない。こうしたカヴァルカンティの失望の声がきこえてくる。『煉獄篇』の第 XXX 歌でベアトリーチェはダンテの過去の「迷い」(‘traviam⁶⁾mento’) を叱責するが、それはちょうどこの時期にあたるのであろう。1300年に黑白両派の不穏分子としてフィレンツェ市のもっとも有力な市民数名が追放に処せられるが、カヴァルカンティもそのうちの一人であった。かれはその追放が因で同年病没する。そのときダンテは市の長官の要職についていた。当然のことながらこの追放はダンテの意志と無関係ではありえなかった。それに先き立つ時期につねに政治的には対立する立場にあったカヴァルカンティとダンテのあいだにはすくなくとも政治の場では交友関係はありえなかったであろう。

したがって『俗語詩論』の執筆当時には、カヴァルカンティはすでに亡き人で、ダンテの過去の記憶に生きる存在であった。それにしてもカヴァルカンティの作品のなかでもっとも重要な詩の一つに数えられ、後世にまでたかい評価を受け、名声を博した “*donna mi prega*” が、第Ⅱ巻の2章、5章、6章のいわゆる国際級の作例のカタログにはまったく引用されずに、第Ⅱ巻の12章で全篇が11音節からなるカンツォーネの作例として、単に技術上の理由で引き合いに出されるにとどまっている。この扱いはいかにも不当といえよう。

これに反しダンテのチーノ・ダ・ピストイアに対する友情は、はるかに持続的で安定したものであったようだ。年令もちかく、政治的・知的体験をほとんどつねに共有してきた二人の詩人のあいだには篤い信頼関係があった。ダンテが他のだれよりもチーノに親近感を抱いたのは、なによりも共通の文学的理想をめざして、芸術的試練の道をとともに歩んだことによると思われる。ダンテがまだフィレンツェにいて、チーノがピストイアにあった13世紀末の数年と追放直後の数年を合わせた約10年のあいだにとくに二人の詩人の友情はまえにもまして深まり、いっそう堅固になったことは疑問の余地がない。二人のあいだで

5) Marti, 1971, pp. 101 e sg.

6) Purg., XXX, 122-145

かわされた数多くのソネットの応答がその間の事情を如実に物語っている。チーノがダンテの追放と同じ理由で追放に処せられたのは、1303年から1306年のあいだであり、ちょうど『俗語詩論』の執筆された時期にあたる。したがってダンテのチーノに対する人間的な共感がカヴァルカンティへの関心よりもはるかに大きなものであったことは当然といえよう。『俗語詩論』においてカヴァルカンティの地位が、降下しているのに対し、チーノの詩作活動がその頂点をきわめたと評価されているのは深層でダンテの自伝的理由が強く作用しているからにはほかならないと思われる。

このような人間関係の考察を通して、ダンテは、意識的にかあるいは無意識的にか自分自身をトスカーナ詩人中第一人者に位置づけようとしていることがわかる。すなわちダンテにとっては、チーノを称揚することはとりもなさず自己自身の卓越性を強調することにほかならなかったのである。すでに述べたごとく自分の詩を15回、詩句を9篇引用しているという事実は、こうした自己主張のあらわれ以外のなにものでもありえないであろう。ダンテはシチリア派のグィードとボローニャのグィニツェッリと自分自身から成るトリプティックの形成を構想し、これら三人の *doctores* (巨匠) をむすぶ太い絆の存在を証明しようと試みたのである。三大詩人はいずれもその芸術的創造を実現するにあたって、極度の詩的感性 (*dulcius*) を示し、哲学的に深遠な主題 (*subtilius*) をあつかう。ダンテは言語と文体のみならず知的・精神的な伝統の継承という事実を強調し、文学史上に自己の正確なゆるぎない地位を確保しようと試みたのであった。

第 V 章 「方言学」の実体

1. 「方言探索」の性格と目的

芳香をはなつパンテラを追いかける狩猟に見立てられた「高貴な俗語」の探求は、「イタリアの森がちな山々や草原」¹⁾を踏み越え「絡みつくつたがづらや茨を森から」²⁾とり除きながら進められるという設定である。しかしダンテがすでにパンテラの捕獲に成功したのだとすれば、なぜ苦心してそのような狩

1) "...saltus et pascua ...Ytalie" (I, 16, 1)

2) "...perplexos frutices atque sentes... de silva" (I, 11, 1)

3) I, 12, 6 に「さきに引用したカンツォーネにおいて観察し得るごとく、最上級のシチリア詩人の口から歌われたままの形でシチリア俗語を考察の対象とするならば、…もっとも賞賛にあたいます俗語となんら異なるところのないものである」とあるからだ。

狼の真似ごとを演じなければならなかったのであろうか。それを明らかにするにはダンテの集めたイタリア諸方言の文例がどのような性格のものであるかを見きわめる必要がある。表Ⅰでみられるごとく文例の数は意外に少く、せいぜい二十ほどである。言及される地名は約四十を数えるが、そのうち「発音」への言及は北部の方言にのみ集中しており、「発音」に関しては北イタリアの方言がとくにダンテの注意をひいたものと想像される。文例のなかには方言を模倣してパロディー風に仕立てたいいわゆる「嘲笑詩」(*canzoni in improprium*)のジャンルに属する詩句がいくつか数えられる。カストラ・フィオレンティーノの *Una fermata scopai*, ミラノ・ベルガモ方言の *Enter l'ora del vesper* などがそれにあたる。チェーロ・ダルカモの有名なカンツォーネ *Rosa fresca aulentissima* (ただしダンテは第3行の詩句を引用している) もこの種のジャンルに属するものとみなされよう。その他の用例は民衆詩かもしくは当時人口に膾炙していた方言の成句などからひろい集めたものであろう。

従来ダンテの「方言学」は、近代の方言学の先駆とみなされ、「この言語(イタリア語)が広がるかぎりの土地は、ほとんどくまなく乞食のようにさまよい歩いた⁴⁾」という『饗宴』の証言をもとにあたかもこれらの方言の用例が、ダンテによって各地で直接に「採集」されたかのように錯覚されてきたふしがある。しかし各々の文例にあたって観察すると、ほとんどすべての場合に方言を嘲笑するための意図的な誇張の傾向がみとめられるのである。その意味でダンテの「方言学」は、一部の人々が信じたような「フィールド・ワーク」の成果ではなく、主として書物の知識による机上の産物であることはまちがいない。

たとえば冒頭のローマ方言の文例, “*Messure, quinto dici?*” について検討を加えよう。古ローマ方言には「母音変異」の現象がみられ, 単. *messóre*/ 複. *messúri* という対応があったためダンテは, 複数形をあやまって単数形ととりちがえたという可能性もすてきれない。しかしむしろ有アクセントの -ó- が閉母音であったので, それを誇張してか, あるいは複数形の「母音変異」を単数形に故意に転移して -ú- とすることにより方言的特徴を誇張してこの方言のくせをからかったと考えた方がよさそうである。

次はサルデーニャ語の用例としてあげられている “*domus nova, dominus*

4) “...per le parti quasi tutte a le quali questa lingua si stende, peregrino, quasi mendicando, sono andato...” (Conv. I, 3, 4)

meus”である。ダンテによればサルデーニャ人は「おのれの俗語をもたぬ唯一⁵⁾の人種のように思われ、まるで猿が人を真似るように、ラテン語を真似ている」。ダンテのサルデーニャ人に対する嘲笑の背景には当時一般に流布していたサルデーニャ人に対する風評があったと思われる。それはサルデーニャ人の言語をふくめて生活様式が、他のイタリア人とは異っており、蛮族に近いという考え方である。⁶⁾ domus, dominus はそれぞれイタリア語の改新形 casa, signore に対応するアルカイックな相様を示しているが、ダンテはこのような頻度のたかい平常の語いにいたるまでラテン語を「猿真似している」という点を強調するためにこの二語を選んだのであろう。

両語の語形であるが、古サルデーニャ語では、ラテン語の語末の -s は、複数のみに保持されているので、単数は、それぞれ domu, donnu のはずである。通常 condaghi といわれている 12 世紀末から 13 世紀初頭にかけてのサルデーニャの土地台帳には、cussa domu⁷⁾(=questa casa), donnu Deu⁸⁾(=signore Dio), donnu meu⁹⁾(=mio signore) といった形がみられる(複数形としては、¹⁰⁾ donnos (=signori)。したがって BGT の三写本の示す domus nova の形はありえず、domu nova (単) か domus novas (複) のいずれかでなければならない。一方 GT の二写本が一致して示す後者の例、dominus meus は donnus meus で明らかに複数形である。このさい考えられることはダンテのサルデーニャ語についての知識が、単複の形の相違を識別しうるほど十分ではなく、単数形にまで -s を附加してしまったということである。しかし一方では『地獄篇』XXII 歌、87 行でサルデーニャ人の Michele Zanche に donno (=signor) というサルデーニャ風の敬称を付けているところをみるとダンテにはその程度の知識があったものと思われる。とするとここでもサルデーニャ方言の特徴を意図的に誇張して、この方言を *improperium* の対象にしたという結論に達せざるをえない。

5) “...soli sine proprio vulgari esse videntur, gramaticam tanquam simie homines imitantes...”(I, 11, 7)

6) たとえば Dino Compagni の *Intelligenza* には次のような詩句がみられる: “lasciate andar que’ Barbarini e Sardi” (116, 2) “gente barbari e siresi e sardi” (263, 9)

7) Carta sarda, Monaci, 1955, 28, 9-10

8) *ibid.*, 2

9) Monaci, *id.*, 10³, 4, 44

10) Monaci, *id.*, 10², 18

2. シチリア・アプーリア方言の場合

ダンテはシチリア方言の文例をあげるにさいして、「シチリアの地元の中級詩人のもちいる俗語——かれらの話ぶりから判断の材料を抽出すべきであると思うが——をシチリアの俗語とみなして採りあげる¹⁾」とことわっている。この「中級の地元出身の詩人」(*terrigenae mediocres*)という用語にみられる *mediocris* という形容詞は「中産階級の、中程度の教養をもつ」という社会階層上のレベルを意味するばかりではなく、文体上のレベルをも暗示しているようである。ダンテは引用語句の文体が *poesia aulica*「宮廷詩」と *poesia popolare*「民衆詩」の中間に位置する *genere giullaresco*「ジョングルール風のジャンル」に属するものであるといおうとしたのであろう。一般に中世では文体のレベルと作品の観賞者もしくは作者の社会的地位とのあいだにはなんらかの相関関係があったとされる。その例としてチェーロ・ダルカモの著名な *Contrasto*「掛合歌」が選ばれるのであるが、この種のシチリア俗語は「選抜の榮譽には毫も値しない」と断定される。その理由は「音節の間のびした発音がきかれる」(*non sine quodam tempore profertur*) (I, 12, 6) ことであるという。この詩句は以下のごとくである。

Tragemì d'este focora, se t'este a bolontade「この炎からひき出しとくれ、おまえにその気があるのなら」

これはチェーロ・ダルカモの唯一の創作として伝承され³⁾, *Rosa fresca aulentissima* という冒頭句をもつ「掛合歌」の3行目の詩句である。この詩はアレクサンドランであるが、前半の詩句が *sdruccioli* で終る場合 (*disiano, fòcora, trabàgliti*) が多いので、ダンテはこの事実をさして「間のびがする」と非難したのであろう。しかしその見解はコンティーニの指摘するように、詩形上の特質と方言のそれとを混同しているとしか思われない。また *este* (=è) と同義語の *este* (指示代名詞) が同一詩句のうちに反復されているのも「間のび」のうちに数えられるかもしれない。この *este* は南部およびシチリアに *esti* の形

1) "...vulgare sicilianum accipere volumus secundum quod prodit a terrigenis mediocribus, ex ore quorum iudicium eliciendum videtur," (I, 12, 6)

2) Mengaldo, 1979, 102-103, n. 6

3) Vat. lat. 3783

4) Rohlfs, 1956-1961, I, p. 238

で広く行きわたり、トスカーナ西部にも見出され、宮廷風の詩にも採り入れられている形である。一方、*focora*(=*fuochi*)は、*tempus/tempora* 型の中性名詞複数形で、中世のイタリアでは広く普及し、トスカーナの文学語にもあらわれている。現在では中南部方言にこの形が保持されている。たとえば *fòcura*, *fòcara* (Terra d'Otranto)⁴⁾; *fòkera* (Velletri)⁵⁾ 等。しかしこの形は「シチリア派」の宮廷風な詩にはまったくあらわれていないので、ダンテはこの形を方言形とみなしたのであろう。*a boluntate* (<*a bbolontate* (AD VOLUNTATEM))は南部方言の DV>bb の統語線に対応する。サリンベーネの「年代記」(*Cronica*)に次のような証言が見出される。アプーリア人とシチリア人は「'Quid vis? といおうとするとき、'ke boli?' という」⁶⁾。

この「掛合歌」からの引用語句は、すでにふれたごとく *incipit* ではなく、3行目の詩句である。第1, 第2行は方言的要素をまったくふくまず、むしろ *lingua aulica* で書かれているからである。⁷⁾ この詩でもちいられた言語をシチリア方言とみなすことに疑問をいただく学者はすくなくない。事実この創作の全体にあたってみるとシチリア方言の要素は意外とすくない。むしろ *lingua aulica* に属する語いの多いのに驚かされる。この詩はモンテヴェルディの指摘のごとく故意に「宮廷風な」言語に方言色をそえた一種のパロディーであり、⁸⁾ 方言的要素は芸術的意図によってシチリアのみならず大陸からも収集されたものらしい。したがって言語と文体に「宮廷風」と「現実派風」の二重性が看取されるのである。この詩の内容は、男女の「掛合」で、プロヴァンスのパストラルにみられるごとく、おそらく男は吟遊^{ジョングルー}芸人で女は百姓女という設定であろう。「二重性」は実際よりも上品に振舞おうとして、背のびする男女の対話に喜劇的な効果をあたえるために考案された手法にほかならず、作者の高度な技巧を示すものである。ダンテは『俗語詩論』の第I巻、11章でローマ人とマルケ人とスポレート人の方言を嘲笑するためにカストラの作になる詩 *Una fermana scopai* を引用しているが、チャーロ・ダルカモの詩もこの系列に近く、⁹⁾ 方言のパロディーをねらった「嘲笑詩」のジャンルに属する創作なのである。

5) Tagliavini, 1949 (1964⁴), p. 203

6) Oswald Holder-Egger, 358, 20

7) Monteverdi, 1954

8) *ibid.*

9) Monteverdi, 1971

ダンテはシチリア方言について、アプーリアの方言の吟味に移る。かれらもまた「ひどく耳ざわりなことばづかいをする。もちまえの粗野に加えてローマ人、マルケ人など隣接する住民との接触によってそうなるのである¹⁰⁾」。ここで注意すべきことは、ダンテのいうアプーリアは、当時アンジュー家支配下にある南イタリア全領域にあたるという点である。これはかなり大まかな方言分類といわざるをえないが、当時中・北部のイタリア人のあいだでは、南部方言を比較的均一のものとみなす慣習があったことも知られている¹¹⁾。アプーリアの方言例は次の11音節の詩句である。

Bòlzero che chiangesse lo quatraro

「その男の児が泣けばよいにとわしは思うが」

bolzero (B 写本; G T 写本では volzero) はラテン語の直接法過去完了から派生した条件法で、シチリア派の詩語にも類似の形があらわれている¹²⁾。chian-gesse (=piangesse) にみられる PL>kj は、今日でも南部方言に広く分布している (サレント ¹³⁾chiangere, カラーブリア ¹⁴⁾chiancere)。*quadrarius (角ばった、すなわち「がっしりした」男児の意) から派生した quatraro (=ragazzo) もまた南イタリアに広範な分布をみせている (カラーブリア quatraru [男児], ブリンディシ quatraru [がっしりした若者], コセンツァ ¹⁵⁾quatrera [男児] 等)。

マリーゴはこの引用例も民衆詩の一節であると解しているが、その当否は別として「欠点の多い音声要素」と「粗野なアクセント」(1, 17, 3)に加えて内容の卑俗性は被うべくもなく「嘲笑」には好個の対象であったと思われる。

3. トスカーナ方言の場合

ダンテは一世代まえのトスカーナの詩人たちの創作を「宮廷的なものではなく、地方的なもの」と批判したのち、トスカーナ方言の用例の引用に移る。この用例の分析を通してまた *municipalia* なる用語でダンテのあらわそうとたことがいっそう明確にされるであろう。ダンテはさすがにトスカーナ方言に

10) “Apuli quoque vel sui acerbitate vel finitimorum suorum contiguitate, qui Romani et Marchiani sunt, turpiter barbarizant;”(I, 12, 7)

11) *Enciclopedia dantesca, Apulia*, I, 337-338

12) Mengaldo, 1979, pp. 104-5, n. 5

13) Rohlfs, 1956-61, v. I. p. 137

14) Rohlfs, 1977, p. 163

15) *ibid.*, p. 563

は詳しく、トスカーナの五大都市の各々について方言的表現の例をあげている。そのさいダンテは "Locuntur Florentini et dicunt:...Pisani..., (I, 13, 2) というふうに列挙していくが、文中の *dicunt* をどう解釈するかが問題である。この *dire* は、しばしば "*rimare*" (詩作する) の意でももちいられるので、ここでもその意味でつかわれたとすると、以下に引用される短文のなかには詩の一節もふくまれうることになる。マリーゴがそのように解釈するのに対し、メンガルドは *locuntur et dicuntur* は、聖書などにしばしばみられる *verba dicendi* の「冗語法」にすぎないとする。¹⁾ まずフィレンツェ方言の文例として次のものがあげられる。

Manichiamo, introque che noi non facciamo altro.

この文には、卑俗な語いとみなされていた *manicare* と *introque* がふくまれている。13世紀から数世紀にわたり、イタリア土着の *manicare* (但し現. 1人称単数 *manuco*) および *man(d)ucare* ²⁾ は、のちに優位に立った外来の *mangiare* と拮抗することになるが、ほとんどつねにフランス渡来の *mangiare* ³⁾ の方が品のよい語いとみなされていた。*manicare* と *manducare* は、「現実派」の詩人たちの好んでもちいるところであった (Folcacchiero de' Folcacchieri: né bono non mi sa lo *manicare*, Monaci, 55,23; Rustico Filippi, Folgore 等)。ダンテはその著作でほとんどつねに *mangiare* をもちいているが、例外が『饗宴』に1例 ("de li angeli si *manuca*,,, I,1,7)『地獄篇』に2例 ("come'l pan per fame si *manduca*", XXXII, 127; "voglia/di *manicar*", XXXIII, 59-60)『詩集』に1例 (la morte, che ogni senso/co li denti d'Amor già mi *manduca*) 見出される。一方 *introque* (introcque) は副詞としては, "fra tempo", "nel tempo" の意で, 接続詞としては "introque che (mentre)" の形でもちいられる。ここでは後者である。この語が『地獄篇』に一度あらわれる (si mi parlava, e andavano *introcque*, XX, 130) ので, ダンテのおかした矛盾が指摘され, それを理由に『俗語詩論』の偽作説がでたことはあまりにも有名である。しかし第Ⅱ巻, 4章で明確に規定されているごとく, 『地獄

1) Mengaldo, 1979, p. 108, n. 6

2) もとは道化役の Manducus のように「あごをふり動かす」ことに起源をもつ (Migliorini, 1960, p. 33) 卑俗な語。

3) Migliorini, op. cit., pp. 171-172

篇』の場合には、扱うテーマに応じて意識的に一段下級の文体がもちいられたのであり、その意味でダンテが矛盾をおかしたという非難はあたらない。この例文では内容がいかに卑俗であることに注目すべきである。ダンテは「卑俗性」の誇張によってフィレンツェ方言を嘲笑しようとしたのであろう。マリーゴはドヴィディオの意見にしたがってこの文を *doppio settenario* すなわちアレクサンドランの民衆詩とみなしているが、メンガルドは疑義を表明している。ピサ方言の文例は次のごとくである。

Bene andonno li fatti de Fiorenza per Pisa.

(フィレンツェの事情はピサには好都合だった)

GT 写本では *fatti* が *fanti* (兵士) となっており、マリーゴは後者を採用している⁴⁾。完了形三人称複数の縮約形 *-onno* は、フィレンツェ方言にも浸透しており、ダンテも踏韻の都合でこの形を1回のみもちいている (*terminonno*, 『煉獄篇』XXVIII, 105) が、もとはピサ=ルッカの方言の特徴であった。13世紀初頭まではピサ=ルッカはフィレンツェより政治的・文化的に優位に立っていたため、両方言のフィレンツェ方言への浸透がみられる⁵⁾。*Fiorenza* における *z > s* もピサ=ルッカ方言の特色の一つである。今日 *-onno* は、フィレンツェの民間語で頻繁にみられる (*andònno*, *trovònno*) ばかりではなく、プラート、ピストイア、シエナ、アレツツォ、エルバ島などほとんどトスカーナ全域に拡がりをみせている⁶⁾。

ルッカ方言の文例は次のものである。

Fo voto a Dio ke in grassara eie lo comuno de Lucca

(はやまったくルッカの町はよう肥えたもんじゃ)。

ことさら卑俗な語いを連ねた文例である。*grassara* は、この例以外の資料的証拠が見当たらないが、*grascia* (= *grassa*) と関係づけられることは確実であり、「豊かさ」「繁栄」を意味することにまちがいはないであろう。いずれにせよ卑俗な響きの語いであることはたしかである。通常の *comune* に対する

4) Marigo, 1956, p. 113

5) Schiaffini, 1954, p. XXVII

6) Rohlfs, 1966, §568

comuno の形は、トスカーナ全域にみられ、フィレンツェ方言にも見出される (Latini, *Tesoretto*, v. 169)。正常の “è” に対して *epentesi* のある *eie* という形も同様に方言色をあらわしている。冒頭の *Fo voto a Dio* (=Giuraddio 神かけて) は、ヴェネツィア方言の用例として引用される *per le plaghe di Dio* (キリストの傷にかけて=神かけて)⁷⁾ に近いきわめて下世話な言い廻しである。たとえばルスティコ・フィリッピなど「現実派」の詩人たちが好んでつかう一連の表現の一つである。後代のボッカッチョ、サケッティなどにも見出される。内容がいかに卑俗で方言の *improperium* 「嘲笑」を主眼としたジャンルを想起させるものである。たとえばチェッコ・アンジョリエーリの作と考えられるソネットに市場の片隅でトスカーナの諸方言でかわされる会話を模した *improperium* がみられるが、多くの類似点があるように思われるので引用してみよう。

“Pelle chiabelle di Dio, no ci arvai,
Poi che feruto hai l’omo di Roma”

“I’ son da Lucca”. “Che’ ddi’ che’ ffarai?”
“Che porto cosse a vender una soma”.

“Doi te gaitivo, u’ ddi, che te ’nde vai?”
“Entro ’gn-Arezzo a vender queste poma”.
“Quest’ àscina comprai da’barlettai
entro ’n Pistoia, e fei tonder la chioma”.

“De’ che’tti dea ’l malan, fi’ de la putta,
ch’a Firenze n’ha, sèrique a danaio,
ed ancor più e’ giungnet’ u’ mellone”.

“A le guagnele, carich’ el somaio,
e porta a Siena a vender chéste frutta,
sì fuoron còlte di buona stagione”.

(Poeti del Duecento, II)

7) I, 15, 6

8) “Io fo ben boto a Dio”(Sonetti burleschi e realistici, 1920, I, p. 10)

「ローマ男を傷つけたおぬし

ここへは戻れんぞ、金輪際。」

「わしはルッカのもんだてな」「何をしようって魂胆だ」

「荷車いっぱいカボチャ売ろうて算段さ。」

「べらぼうめ、ここからどこへ持ってく気かよ」

「アレツォにさ、このくだもの売りに。」

「わしはこのロバを買い取った、ピストイアの桶屋から。

タテガミの刈込みも済ませた奴さ。」

「唐変木め、くそでも喰らえ、

フィレンツェじゃ一文出せばひと山ってとこよ、

瓜の一個もおまけにそえて」

「べらぼうめ、ロバに積みなよ、

このくだものはシエナに持ってって売ることだ。

詠え向きの熟れごろにもいだもんだで。」

Pelle chiabelle di Dio「キリストの〔十字架の〕クギにかけて」は、ヴェネツィア方言の *Per le plaghe di Dio* (I, 14, 6) を想起させるローマ方言の卑俗な言い廻りである。複合前置詞の *entro'n* が2回もちいられているが、そのうちの一つ *entro'gn-Arezzo* にはトスカーナ方言にはまれでない口蓋音化の現象がみられる。*ascina* は典型的なルッカ方言であり、*cheste* は、ダンテが引用するシエナ方言の文例にもあるごとくシエナ方言に特有な形である。*a le guagnele* は、⁹⁾ フォルゴーレにみられ、フィレンツェに広く行き渡った間投辞である。*per i Vangeli*「福音の使徒にかけて」のなまった形であるが、ゲルマン語の影響で *va-* が *gua-* に転化したものである。

シエナ方言の文例:

Onche renegata avess'io Siena. Ch'ee chesto?

「おれが一度でもシエナを見捨ていたら。どうなったろうか」

onche (=unche) および *chesto* (=questo) にみられるように指示詞および

9) Contini, 1960, II, p. 416

一連の副詞にあらわれる KW>k の推移現象は、古シエナ方言の特徴である。¹⁰⁾ さきに引用した *Pelle chiabelle di Dio* の *cheste frutta* (13行) もその一例である。B 写本の *avessio* に対して G 写本は *avesse io* の形を示しているが、接続法半過去 1 人称単数の -ssi に対して -sse の形を示す語尾変化は、13世紀まではフィレンツェでも普通であった。¹¹⁾ シエナではこの形のみが定着しており、16世紀末まで保持される。¹²⁾ *ee* もまたシエナ方言の形である。

アレツォ方言の文例:

Vuo, tu venire ovelle? 「どこぞにおまえは来たいのか？」

この文例中方言的特徴をあらわす語いは、*ovelle* のみである。この *ovelle* (lat. UBI VELLIS) は、現在のアレツ方言で *uvelle*, *duvelle* 等の形で行われている。場所の副詞+VELLIS の形は、トスカーナ南東 (コルトーナ, アレツォ=キナイオーロ) にとくにいちじるしい分布がみられる。一方 QUOD VELLIS (=qualunque cosa tu voglia) から派生した *covelle* (もしくは *cavelle*)¹³⁾ の形が、シエナとウンブリアの古方言に見出される。意味は、「何か」、否定文における *nulla* であり、次の例にみられるごとくである。 “lo mi, cor s'allegria di *covelle*” (チェッコ・アンジョリエーリ, ソネット27)。¹⁴⁾

これら五方言の文例がたとえメンガルドの主張の¹⁵⁾ように詩の一節とはみなされがたいとしても、方言的要素のみならず内容の卑俗性や言い廻わしが「現実派」の詩人の作風を彷彿とさせ、とくに方言の *improperium* をテーマとするジャンルの創作を連想させるに足ることは以上の考察からも明らかであろう。したがってダンテは意識的にこれらの文例を方言の *improperium* の目的で収集し、「高貴な俗語」の輝きをいっそう際立たせるためにその引き立て役として用いたに相違ないのである。

10) Castellani, 1952, p. 45

11) *ibid.*, p. 156

12) *ibid.*, p. 158-9

13) Rohlf, 1966, 502; 913

14) Sonetti Burleschi, 1920, I, p. 76

15) Mengaldo, 1979, pp. 110-111

おわりに

以上の論述を通して『俗語詩論』の意図と真意はすでに明らかにされたと信ずる。論考の構成においては典型的な中世の修辞学の手法を忠実に踏襲しながらもダンテは一方でそうした文学的伝統とは異質の新しい要素をこの著作に織り込んでいる。それはプロヴァンスの詩から「清新体派」へと受け継がれていった輝かしい伝統をもつ文学の系譜のなかに自身の占める地位を際立たせようとする試みである。この著作もまた、他のダンテの作品と同様に自己の創作活動の意義を問い、それを歴史的に把握したうえで文学史の流れのうちに自己を位置づけようとする不断の欲求にうながされて、かきあげられたものにほかならない。こうした視点からこの作品を捉えなおすならば、従来かしましく論議されてきたこの著作の内包する矛盾と論理の不整合が、単に表層的なものであったことが理解されよう。要するにこのラテン語の論考は、作者がかつて『新生』においてなしとげ、この著作と同時期に執筆されていた『饗宴』において試みつつあった「自己解釈」の別種の試みにほかならない。しかしこの事実はこの作品がもっぱら主観的・趣味的判断を拠り所とすることを意味せず、むしろダンテの独創性は、確固とした歴史的視座のもとに自己の体験の意味を普遍化する計り知れぬ能力のうちに求められるべきことを示唆している。

文献目録

下記には本書で利用・言及・引用した文献のみを収録する。

I 『俗語詩論』刊本

a 原典（テキスト）

Rajna, P., *Il trattato "De vulgari eloquentia" di Dante Alighieri*, per c. di P. Rajna, Firenze, 1896 (ristampa, Milano, 1965)

Id. (edizione minore), Firenze, 1897

Bertalot, L., *Dantis Alagherii de vulgari eloquentia libri II*, recensuit L. Bertalot, Friedrichsdorf apud Francofurtum ad M., 1917 (Ginevra, 1920)

Marigo, A., *De vulgari eloquentia*, ridotto a miglior lezione, commentato e tradotto da A. Marigo, Firenze, 1938 (3a ed., *ib.*, 1957)

Mengaldo, P. V., D. Alighieri, *De vulgari eloquentia*, a c. di P. V. Mengaldo, I, Introduzione e testo, Padova, 1968

Iwakura, T. 『ダンテ俗語詩論』(岩倉具忠訳注), 東京1984

b 翻 訳

- Trissino, G. G., *De La Vvlgare Eloquenzia*, Vicenza, 1529
- Marigo, A., *op. cit.*
- Mengaldo, P. V., *De vulgari eloquentia*, a c. di P. V. Mengaldo (Dante Alighieri, *Opere minori*, II), Milano-Napoli, 1979
- Cecchin, S., *De vulgare eloquentia*, a c. di S. Cecchin (*Opere minori* di Dante Alighieri), Torino, 1983
- Godaert, P., *De l'art d'écrire en langue vulgaire*. Introduction et traduction de P. Godaert, Louvain, 1948
- Pézard, A., *De l'éloquence en langue vulgaire*, traduction et commentaires par A. Pézard (*Oeuvres complètes de Dante*), Paris, 1965, pp. 551-630
- Howell, F., *The "De Vulgari Eloquentia"*, in *A Translation of the latin Works of Dante Alighieri*, New York, 1905 (Reprint, 1969)
- Haller, R. S., *On Eloquence in the vernacular*, translated and edited by R. S. Haller, Lincoln and London, 1973
- Welliver, W., *Dante in Hell. The "De Vulgari Eloquentia"*, Introduction, Text, Translation, Commentary, Ravenna, 1981
- Dornseiff, F. Balogh, J., *Über das Dichten in der Muttersprache. De vulgari eloquentia*, aus dem Lateinischen übersetzt und erläutert von F. Dornseiff u. J. Balogh, Darmstadt, 1925 (ristampa, *ib.*, 1966)
- Iwakura, T., *op. cit.*

II ダンテの他の著作原典 (テキスト)

- La Commedia*, secondo l'antica vulgata, a c. di G. Petrocchi, Milano 1966-1967, voll. 4
- La Divina Commedia*, a c. di U. Bosco e G. Reggio, Firenze, 1979, voll. 3
- Il Convivio*, ridotto a miglior lezione e commentato da G. Busnelli e G. Vandelli, Firenze, 1964²
- Il Convivio*, ed. critica a c. di M. Simonelli, Bologna, 1966
- Monarchia*, a c. di P. G. Ricci, Milano 1965
- Rime*, testo critico, introduzione e note a c. di G. Contini, Torino, 1946 (1970²)
- Rime della "Vita Nuova" e della giovinezza*, a c. di M. Barbi e F. Maggini, Firenze, 1956
- Rime della maturità e dell'esilio*, a c. di M. Barbi e V. Pernicone, Firenze 1969
- Vita Nuova*, a c. di D. De Robertis, Milano, 1980
- Il Fiore e il Detto d'amore*, attribuibili a Dante Alighieri, a c. di G. Contini, Milano, 1984

III ダンテ以外の著作原典 (テキスト)

- Boccaccio, *Decameron*, a c. di V. Branca, Torino, 1980
- Brunetto Latini, *Li Livres dou Tresor*, édition critique par F. J. Carmody, Berkeley-Los Angeles, 1948 (Reprint, Genève, 1975)
- Brunetto Latini, *La Rettorica*, a c. di F. Maggini, Firenze, 1968
- Giacomo da Lentini, *Poesie I*, edizione critica a c. di R. Antonelli, Roma, 1979
- Guido Cavalcanti, *Rime*, a c. di G. Favati, Milano-Napoli, 1957
- L'Intelligenza*, a c. di G. Petronio in *Poemetti del 200*, Torino, 1951 (Rist. 1970)
- Poeti del Dolce Stil Nuovo*, ved. Marti, M.

Poeti del Duecento, ved. Contini, G.

Restoro d'Arezzo, *La composizione del mondo colle sue cascini*, edizione critica a c. di A. Morino, Firenze, 1976

Sonetti burleschi e realistici dei primi due secoli, a c. di A. F. Massera, "Scrittori d'Italia", Bari, 1920, voll. 2

Salimbene, *Cronica fratris salimbene de Adam*, a c. di O. Holder-Egger, Hannover-Leipzig, 1913
(*Cronica di Fra Salimbene di Adam*, a c. di G. Scalia, Bari, 1966が入手できなかったので止むを得ず旧版を用いた)

Thomae Aquinatis, *Opera omnia*, a c. di R. Busa, Milano, 1980, voll. 7

Villani, G., *Cronica*, Firenze, 1823 (rist., Roma, 1980)

IV 辞書・事典類

Blaise, A., *Dictionnaire latin-français des auteurs chrétiens*, Turnhout, 1954

Blaise, A., *Lexicon Latinitatis Medii Aevi*, Turnhout, 1975

Dictionnaire de la littérature française, 『フランス文学辞典』, 日本フランス語フランス文学会編, 東京, 1979

Dizionario critico della letteratura italiana, a c. di V. Branca, Torino, 1973-74, voll. 3

Enciclopedia dantesca, Roma, 1970-78, voll. 6

Ernout-Meillet, *Dictionnaire étimologique de la langue latine*, Paris, 1967

Habel E.-Gröbel F., *Mittelateinisches Glosar*, Paderborn

Index Thomisticus, Sancti Thomae Aquinatis Operum omnium indices et concordantiae, Milano, 1974-1980

Meyer-Lübke, W., *Romanisches Etymologisches Wörterbuch*, Heidelberg, 1935

Niermeyer, J. F., *Mediae latinitatis lexicon minus*, Leiden, 1976

Rohlfs, G., *Nuovo Dizionario Dialettale della Calabria*, Ravenna, 1977

Rohlfs, G., *Toscana dialettale delle aree marginali: vocabolario dei vernacoli toscani*, Firenze, 1979

Rohlfs, G., *Vocabolario dei dialetti salentini (Terra d'Otranto)*, München, 1956-1961

V 研究文献

a 単行本

Antonelli, R., *Seminario romanzo*, Roma, 1979

Atti del Convegno di studi su Dante e la Magna Curia, Palermo, 1967

Boyde, P., *Dante's Style in His Lyric Poetry*, Cambridge 1971.

Castellani, A., *Nuovi testi fiorentini del Duecento*, Firenze, 1952, voll. 2

Chaytor, H. J., *The Troubadours of Dante*, Oxford, 1902 (reprint 1974)

Contini, G., *Poeti del Duecento*, Milano-Napoli, 1960, voll. 2

Contini, G., *Un'idea di Dante*, Torino, 1970.

Contini, 1970², Ved. *Rime di Dante*

Corti, M., *Dante a un nuovo crocevia*, Firenze, 1981

Curtius, E. R., *Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter*, Bern, 1954 (Minamiôji-Kishimoto-Nakamura 訳, 『ヨーロッパ文学とラテン中世』 Tokyo, 1971)

Dardano, M., *Lingua e tecnica narrativa nel Duecento*, Roma, 1969

Davis, C. T., *Dante's Italy and other essays*, Univ. of Pennsylvania Press, 1984.

- De Stefano, A., *La cultura alla corte di Federico II imperatore*, Palermo, 1938.
- Devoto, G., *Profilo di storia linguistica italiana*, Firenze, 1953
- Faral, E., *Les arts poétiques du XII^e et du XIII^e siècle*, Paris, 1924 (Reprint, Genève-Paris, 1982)
- Favati, G., *Inchiesta sul Dolce Stil Nuovo*, Firenze, 1975
- Gallo, E., *The Poetria Nova and its sources in Early Rhetorical Doctrine*. The Hague-Paris, 1971
- Gaspary, A., *La scuola poetica siciliana del secolo XIII* (trad. dal tedesco da S. Friedmann) con aggiunte dell'autore e prefazione del D'Ancona, Livorno, 1882 (rist. Bologna, 1980)
- Lazzeri, G., *Antologia dei primi secoli della letteratura italiana*, Milano, 1954
- Mäder, R. C., *Le proposizioni temporali in antico toscano* (sec. XIII/XIV), Bern, 1968
- Marigo, A., *Mistica e scienza nella "Vita Nuova"*, Padova, 1914
- Marti, M., *Poeti del Dolce Stil Nuovo*, Firenze, 1969
- Marti, M., *Con Dante fra i poeti del suo tempo*, Lecce, 1971²
- Marti, M., *Storia dello Stil Novo*, Lecce, 1974, voll. 2
- Mengaldo, P. V., *Linguistica e retorica in Dante*, Pisa, 1978
- Michaud-Quantin, P., *Etudes sur le vocabulaire philosophique du Moyen Age*, Roma, 1970
- Migliorini, B., *Storia della lingua italiana*, Firenze, 1960
- Monaci, E., *Crestomazia*, Roma-Napoli-Città di Castello, 1955
- Montanari, F., *L'esperienza poetica di Dante*, Firenze, 1968
- Nardi, B., *Dante e la cultura medievale*, Bari, 1942; n. ed. a. c. di P. Mazzantini, *ib.*, 1983
- Pagani, I., *La teoria linguistica di Dante*, Napoli, 1982
- Pagliaro, A., *Nuovi saggi di critica semantica*, 1971²
- Panvini, B., *Le rime della Scuola Siciliana*, Firenze, 1962
- Paterson, L. M., *Troubadours and Eloquence*, Oxford, 1975
- Pazzaglia, M., *Il verso e l'arte della canzone nel "De vulgari eloquentia"*, Firenze, 1967
- Peirone, L., *"De Vulgari eloquentia" e la linguistica moderna*, Genova,
- Pellizzari, A., *La vita e le opere di Guittone d'Arezzo*, 1906, Pisa
- Rohlf, G., *Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti*, Torino, 1966-69, voll. 3
- Schiaffini, A., *Momenti di storia della lingua italiana*, Roma, 1953
- Schiaffini, A., *Testi fiorentini del Duecento e dei primi del Trecento*, Firenze, 1954²
- Schiaffini, A., *La lingua dei rimatori siciliani del Duecento*, *Lezioni dell'Anno Acc.* 1956-57, a c. di F. Sabatini, Roma, 1957
- Serianni, L., *Ricerche sul dialetto aretino nei secoli XIII e XIV*, Firenze, 1972
- Spongano, R., *Nozioni ed esempi di metrica italiana*, Bologna, 1966
- Stussi, A., *Testi veneziani del Trecento*, Pisa, 1965
- Tagliavini, C., *Le origini delle lingue neolatine*, Bologna, 1949 (1964⁴)
- Terracini, B., *Analisi stilistica*, Milano, 1966
- Vanasco, R., *La poesia di Giacomo da Lentini—Analisi strutturali*, Bologna, 1979
- Vecchi, G., *Il magistero delle "Artes" latine a Bologna nel Medioevo*, Bologna, 1958
- Vinay, G., *Dante latino*, Roma, 1959
- Zingarelli, N., *La vita, i tempi e le opere di Dante*, Milano, 1944, voll. 2
- Zumthor, P., *Essai de poétique médiévale*, Paris, 1972 (trad. it. di M. Liborio, *Semiologia e poetica medievale*, Milano, 1973)

b 論 文

- Antonelli, R., *Letterature volgari, ragioni politiche, doctores: Magna Curia e la Scuola Siciliana*, in *Federico II e l'arte del Duecento italiano*, a c. di A. M. Romanini, II, Galatina, 1980, pp. 199-257
- Baldelli, I., *Lingua e stile nelle opere volgari di Dante*, in *Enciclopedia dantesca*, Vol. VI, pp. 55-112
- Buck, A., *Gli studi sulla poetica e sulla retorica di Dante e del suo tempo*, in "Cultura e Scuola", IV, 1965, fasc. 13-14, pp. 143-166
- Casella, M., *Recensione su "Il dolce stil novo" di F. Figurelli*, Napoli, 1933 in "Studi Danteschi", XVIII, 1934, pp. 105-126
- Corti, M., *Dante e la Torre di Babele: una nuova allegoria in factis*, in *Il viaggio testuale*, Torino, 1978, pp. 245-256
- Contini, G., *Recensione sul "De vulgari eloquentia," ridotto a miglior lezione e commentato da A. Marigo*, in "Giornale storico della letteratura italiana", CXII, 1939, pp. 283-293
- Contini, G., *La poesia rusticale come caso di bilinguismo*, in *La poesia rusticale nel Rinascimento*, 1969, pp. 51-52
- Cottone, G., *Il Contrasto di Cielo d'Alcamo e la dottrina linguistica di Dante*, in *Atti Magna Curia*, cit., pp. 89-97
- Davis, Ch. T., *Education in Dante's Florence*, in "Speculum", XL, 1965, n. 1, pp. 415-435 (Davis, 1984, pp. 137-165)
- De Robertis, D., *Storia della poesia e poesia della propria storia nel XXII della "Vita Nuova"*, "Studi danteschi", LI, 1978, pp. 153-177
- Di Capua, F., *Insegnamenti retorici medievali e dottrine estetiche moderne nel "De vulgari eloquentia" di Dante*, (1945), poi in *Scritti minori*, II, Roma, 1959, pp. 252-354
- D'Ovidio, F., *Dante e la filosofia del linguaggio*, (1901), poi in *Opere di F. D'Ovidio*, II, Napoli, 1931, pp. 291-325
- D'Ovidio, F., *La metrica della canzone secondo Dante*, (1978), poi in *Opere di F. D'Ovidio*, XIII, Napoli, s. d., pp. 147-167
- D'Ovidio, F., *Sul trattato "De vulgari eloquentia" di Dante Alighieri*, (1873), poi in *Opere di F. D'Ovidio*, IX, II, Napoli, 1932, pp. 217-332
- Favati, G., *Le polemiche del (e contro il) Cavalcanti*, in *Inchiesta sul Dolce Stil Nuovo*, Firenze, 1975, pp. 78-105
- Favati, G., *Quel che ci documenta il "De vulgari eloquentia"*, in *op. cit.*, pp. 33-55
- Grayson, C., *'Nobilior est vulgaris': Latin and Vernacular in Dante's Thought*, in *Centenary Essays on Dante*, Oxford, 1965, pp. 54-76 (Cinque saggi su Dante, Bologna, 1972, pp. 1-31)
- Guerrieri Crocetti, C., *Divagazioni sul De vulgari eloquentia*, in *Nel mondo neolatino*, Bari, 1969, pp. 361-377
- Haskin, Ch. H., *Latin Literature under Frederik II*, in *Studies in Mediaeval Culture*, New York, 1929, pp. 124-147
- Iwakura, T., 「シチリア派の言語と文体について——Giacomo da Lentini と Guido delle Colonne にみられる——」, 『イタリア学会誌』, 27号, 1979, pp. 24-47
- Iwakura, T., 「『新生』の散文について」, 『日伊文化研究』, 21号, 1983, pp. 93-103
- Iwakura, T., 「『俗語詩論』の内容」, 『ダンテ俗語詩論』(岩倉具忠訳注), 1984, pp. 227-244

- Iwakura, T., 「ダンテの言語思想とその fonti について」, *ibid.* pp. 245-267
- Li Gotti, E., *La questione dei "siciliani"*, in "Studi letterari, Miscellanea in onore di E. Santini", Palermo, 1956.
- MacLennan, L. T., *Autocomentario en Dante y comentarismo latino*, "Vox Romanica", 19/1, 1960, pp. 82-123
- Maggini, F., *Il "De vulgari eloquentia"*, in *Introduzione allo studio di Dante*, (Bari, 1936) poi Pisa, 1965, pp. 70-76
- Marti, M., *Il giudizio di Dante su Guido delle Colonne*, in *Atti Magna Curia*, cit., pp. 192-200
- Mengaldo, P. V., *De Vulgari Eloquentia; Gramatica; Lingua*, in *Enciclopedia dantesca*, II, 1970, pp. 104-115 e III, 1971, pp. 259-264 e 656-663
- Monteverdi, A., "*Rosa fresca aulentissima... tragemì d'este focora...*" in *Studi e saggi sulla letteratura italiana dei primi secoli*, Milano-Napoli, 1954, pp. 101-123
- Monteverdi, A., *Giacomo da Lentino e Cielo d'Alcamo*, in *Cento e Duecento*, Roma, 1971, pp. 277-305
- Nardi, B., *Il linguaggio*, in *Dante e la cultura medievale*, (1942¹), nuova ed. Bari, 1983, pp. 173-195
- Nencioni, G., *Dante e la retorica*, in *Dante e Bologna nei tempi di Dante*, Bologna, 1967, pp. 91-112
- Padoan, G., *Il "De vulgari eloquentia"*, in *Introduzione a Dante*, Firenze, 1975, pp. 67-71
- Pagliaro, A., *Teoria e prassi linguistica in Ulisse*, II, Messina-Firenze, 1966, pp. 529-583
- Pagliaro, A., *I "primissima signa" nella dottrina linguistica di Dante*, (1947) poi in *Nuovi saggi di critica semantica*, Messina-Firenze, 1971², pp. 215-238
- Pagliaro, A., *Il contrasto di Cielo d'Alcamo* in *Saggi di critica semantica*, (1953¹), Messina-Firenze, 1976, pp. 229-79
- Panvini, B., *L'esperienza dei Siciliani e il volgare illustre di Dante*, in *Atti Magna Curia*, cit., pp. 236-249
- Paratore, E., *Il latino di Dante*, in *Tradizione e struttura in Dante*, Firenze, 1968, pp. 127-177
- Pellegrini, S., *De vulgari eloquentia, Libro I, capp. 10-19*, in "Studi mediolatini e volgari", VIII, 1960, pp. 155-163
- Petrocchi, G., *La vicenda biografica di Dante nel Veneto*, in *Dante e la cultura veneta*, a c. di V. Branca e G. Padoan, Firenze, 1966, pp. 13-27
- Pézard, A., "*La rotta gonna*". *Gloses et corrections aux textes mineurs de Dante. De vulgari eloquentia*, II, Paris, 1969, pp. 7-51
- Piccitto, G., *Il capitolo XII del I libro del "De Vulgari Eloquentia" nell'interpretazione di C. M. Arezzo (1543)*, in *Atti Magna Curia*, cit., pp. 381-412
- Rajna, P., *Il trattato "De Vulgari Eloquentia"* in *Lectura Dantis. Le opere minori di D. Alighieri*, Firenze, 1905, pp. 195-221
- Rajna, P., *Per il "Cursus" medievale e per Dante*, in *Studi di filologia italiana*, III, 1932, pp. 5-87
- Roncaglia, A., *Sul "Divorzio tra musica e poesia" nel Duecento italiano*, in *L'Ars nova italiana del Trecento, Certaldo*, 1978, pp. 365-397
- Roncaglia, A., *Per il 750. anniversario della scuola siciliana*, 1983(未刊行草稿), 『シチリア派生誕750周年に寄せて』(岩倉具忠訳)『イタリア会誌』, 33号, 1985, pp. 1-26
- Ruggieri, R. M., *Approccio al De Vulgari e al volgare di Dante* in *Capitoli di storia linguistica e*

- letteratura italiana*, Roma, 1971, pp. 26-45
- Scaglione, A., *Dante and the Rhetorical Theory of Sentence Structure*, in *Medieval Eloquence*, ed. by J. J. Murphy, Berkeley-Los Angeles-London, 1978, pp. 252-269
- Schiaffini A., *A proposito dello "stile comico" di Dante*, in *Momenti di storia della lingua italiana*, Roma, 1953², pp. 43-56
- Schiaffini A., *Avviamenti della prosa del secolo XIII*, *ibid*, pp. 71-91
- Schiaffini, A., *Lo stile nuovo e la "Vita Nuova"*, in *Tradizione e Poesia*, Roma, 1969
- Segre, C., *La prosa del Duecento*, in *Lingua, stile e società*, Milano, 1974, pp. 13-48
- Segre, C., *La sintassi del periodo nei primi prosatori italiani* (Guittone, Brunetto, Dante), *ibid*, pp. 79-270
- Stussi, A., *Postilla ai testi veneziani*, in "Studi linguistici italiani", V, 1965, pp. 181-83
- Stussi, A., *Sui fenomeni del dialetto veneziano antico*, in "Italia dialettale", XXVII, 1965, pp. 125-142
- Terracini, B., *Natura ed origine del linguaggio umano nel "De vulgari eloquentia"*, in *Pagine e appunti di linguistica storica*, Firenze, 1957, pp. 237-246
- Terracini, B., *Analisi dello "stile legato" della Vita Nuova*, *ibid*, 247-263
- Terracini, B., *Analisi dei toni narrativi nella Vita Nuova e loro interpretazione*, *ibid*, pp. 264-272
- Toynbee, P., *The Bearing of the "Cursus" on the Text of Dante's "De Vulgari Eloquentia"* in "Proceedings of the British Academy", XI, 1923, pp. 1-19
- Vidossi, G., *L'Italia dialettale fino a Dante*, in *Le origini*, Napoli-Milano, 1956, pp. XXXIII-LXXI
- Weiss, R., *Links between the "Convivio" and the "De Vulgari Eloquentia"*, in "Modern Language Review", XXXVII, 1942, pp. 156-168

表I 『俗語詩論』に

章	地名	発音	用
			否 定 的
XI	Roma		Messure, quinto dici?
	Ancona		Chignamente state siate
	Spoletto		Una fermata scopai da Casciòli cita cita se'n già'n grande aina
	Milano, Bergamo		Enter l'ora del vesper, ciò fu del mes d'ochiover
	Aquileia, Istria		Ces fas-tu?
	Casentino, Fratta		
	Sardegna		domus nova, dominus meus
XII	Sicilia		Tragemì d'este focora, se t'este a bolontate
	(terrigene)		
	Apulia		Bòlzerà che chiangesse lo quatraro
	(terrigene)		
XIII	Toscana :		
	Firenze		Manichiamo, introque che noi non facciamo altro
	Pisa		Bene andonno li fatti de Fiorenza per Pisa
	Lucca		Fo voto a Dio ke in grassara eie lo comuno de Lucca
	Siena		Onche renegata avess'io Siena. Ch'ee chesto?
	Arezzo		Vuo'tu venire ovelle?
	Perugia, Orvieto, Viterbo, Civita-castellana		
	Genova	<u>z</u>	
XIV	Romagna :	deusci	
	Forlì	oclo meo	
	Faenza	corada mea	
	Brescia, Verona,		
	Vicenza	magara	
	Padova	mercò, bontè	
	Treviso	nof, vif	
	Venezia		Per le pleghe di Dio tu no verras
XV	Bologna		
	Imola	lenitas mollities	
	Ferrara, Modena	garrulitas	
	(Mantova, Cremona Brescia, Verona)		
	Reggio	montò	
	Parma		
	Trento		
	Torino		
	Alessandria		

例	詩 人 名	divertere
肯 定 的		
Anchor che l'aigua per lo foco lassi Amor, che lungiamente m'hai menato Madonna, dir vi voglio Per fino amore vo sì letamente	(Guido delle Colonne) (Cielo d'Alcamo) (Giacomo da Lentini) (Rinaldo d'Aquino) Guittone, Bonagiunta, Gallo, Mino Mocato, Brunetto Cavalcanti, Lapo, Dante, Cino	+ +
	Tommaso da Faenza Ugolino Bucciola Aldobrandino	+ +
Madonna 'l fino amore ch'io vi porto Donna, lo fermo core Lo meo lontano gire Più non attendo il tuo soccorso, Amore	Guinizzelli Ghislieri Fabruzzo Onesto da Bologna Sordello	+ +

表Ⅱ 『俗語詩論』における作家・作品の引用頻度

詩 人 名	第Ⅰ巻	第Ⅱ巻	引用頻度	引用作品数
Aldobrandino dei Mezzabati	XIV, 7		1	
Bonagiunta Orbicciani	XIII, 1		1	
Brunetto Latini	XIII, 1		1	
Castra fiorentino	XI, 4		1	1
(Cielo d'Alcamo)	XII, 6		1	1
Cino da Pistoia	X, 2 XIII, 4 XVII, 3	II, 8 V, 4 VI, 6	6	3
Dante	X, 2 XIII, 4 XVII, 3	II, 8 V, 4* VI, 6 IIVI, 8** X, 2*** XI, 5; 7*; 8 XII, 3**; 8 XIII, 2***; 13	15	9
Fabruzzo de'Lambertazzi	XV, 6*	XII, 6*	2	1
Gallo pisano	XIII, 1		1	
(Giacomo da Lentini)	XII, 8		1	1
Gotto mantovano		XIII, 5	1	
Guido Cavalcanti	XIII, 4	VI, 6 XII, 3*; 8*	4	2
Guido delle Colonne	XII, 2* XII, 2**	V, 4* VI, 6**	4	2
Guido Ghislieri	XV, 6*	XII, 6*	2	1
Guido Guinizzelli	IX, 3* XV, 6	V, 4* VI, 6 XII, 6	5	4
Guittone d'Arezzo	XIII, 1	VI, 8	2	
Lapo Gianni	XIII, 4		1	
Mino Mocato	XIII, 1			
Onesto bolognese	XV, 6		1	1
Rinaldo d'Aquino	XII, 8	V, 4	2	2
Sordello da Goito	XV, 2		1	
Tommaso da Faenza	XIV, 3		1	
Ugolino Bucciola	XIV, 3		1	

下線は詩句の引用を示し、星印は同一詩句をあらわす。